俳　句　雑　誌

水　明

2021　1月号

令和三年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第一号

新年おめでとうございます

本年もどうぞよろしく

令和三年元旦

主　宰　山本鬼之介

水　明　全　国　大　会

令和２.11. 9　〈於 ロイヤルパインズホテル浦和〉

主宰と各賞受賞者の皆様

水　明

第1084号

―華の一句―

指先で歌ふシャンソン冬の星

山田美佐尾

シャンソンを熱唱する歌手の独特なポーズが、この俳句によく詠まれている。胸の奥から湧き出てくるような歌詞の一つ一つに魅せられるシャンソン。冬の夜、目の前で歌われる数々のシャンソンを堪能し、ライブハウスを出ると、歌に出てきたような星が瞬いていた。

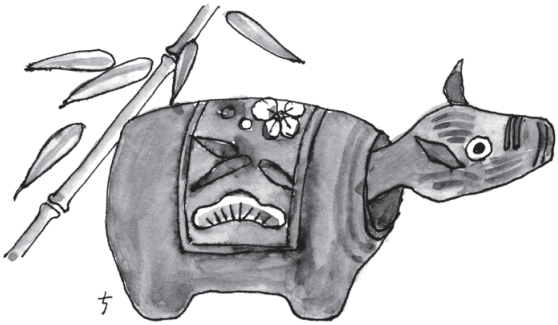
（鬼之介・推薦）

水明

令和３年

１　月　号

華の一句　山本鬼之介　1
過　分（作品）　山本鬼之介　4
有　難　し（近詠）　五明　昇　6
菩　提　寺（近詠）　矢作水尾　7
俳句における虚と実　山本鬼之介　8
季語に付く助詞、季語を導く助詞　網野月を　10
冠　木　門　※主宰作品の鑑賞　境　延昭　14
硯　箱　※季音月評　井口俊晴　16
全国大会の記　五明　昇　18
季音「雪」（同人作品）　椎野美代子　鈴木康世　島津初花　ほか　22
季音「月」（同人作品）　小倉倭子　藤澤喜久　丸山マスミ　ほか　28
季音「花」（同人作品）　野口和子　井上玲子　梅澤佐江　ほか　33
鼓　笛　集（同人作品）・私の一句　60
現代俳句鑑賞　網野月を　38



水明集

曲淵徹雄　原田秀子
保坂翔太　ほか

水明集作品評　山本鬼之介　54
水琴窟（水明集十一月号鑑賞）　池田雅夫　58
新企画のお知らせ　37
俳誌望見　梅澤佐江　40
句集喝采　近藤徹平　63
水明例会報・各地句会報　64・67
新春俳句大会のお知らせ・水明忌のご案内　66・71
新珠賞作品募集　53
風声・水明発展基金御礼　72・73
運営組織　74・75
年間行事予定　76
水明例会および各地句会・教室のご案内　77
後記　80

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

過分

山本鬼之介

教壇の花器に千両アヴェ・マリア

湯豆腐にうかぶ昔の葛西橋

マスクして吾が福耳のたしかなる

鷹舞ふや武蔵野陵の高空を

焼藷買うてゆるりゆるりと九段坂

晦日蕎麦二杯健康優老女

騒音にあらず文化ぞ除夜の鐘

身に余る初夢しかも膝枕

有難し

五明　昇

旅師走気忙しく住く峰の雲

「掻つ込め」に縋る人波年の市

束の間の社務所の息ひ晦日蕎麦

除夜の鐘忘れ上手を身上に

健やかな世過ぎの証賀状来る

年立つや木遣りの響く日本橋

具足餅塵ひとつなき奥書院

「あたりまえ」は「当然」の当て字「当前」が訓読みされて広まった言葉だというが、新型コロナウイルスの感染拡大で、この「あたりまえ」が急速に揺らぐこととなった。

「あたりまえ」と考えがちな「ありがたい」ことに気づき、感謝の気持ちを忘れずに生きよ、とはみ仏の教え。今まで当たり前だと思っていた毎日の出来事が、いかに有難いことなのか、痛感させられる昨今だ。

「当たり前」を「有難し」に変えて年越しの風情を詠んだ。

菩提寺

矢作水尾

山門をくぐれば音の落葉かな

茶の花や緑青の屋根反り返る

葉がくれの茶の花白し庫裡あかり

禅寺の小砂利湿らす里時雨

閑かさや寺の菩提樹散り初むる

落葉舞ふ墓碑に受賞の香をたく

結願を果せし寺の照紅葉

家の近くの由緒ある禅寺は、鎌倉建長寺の分院で一山を背に地味な大きな古刹である。

我が家の菩提寺のこの寺は、車で十分位なので毎週参詣している。山に添って大樹が高い屋根のようになり、手入の行き届いた木々草木が、季節の移り変りを見せてくれる。

墓碑となった夫と一方通行の語らいをしてくるのが楽しみ。先週は「かな女賞」受賞式が無事に終ったことを報告。寺の落葉を踏んで帰宅した。

俳句における虚と実

（第四回水明塾講話資料）　山本鬼之介

［はじめに］

今回、研修部からこのテーマを与えられた時、自分にとっては普段から身近に感じていることなのであっさり引き受けたものの、いざその内容を、会員諸氏に分かり易く説明するとなると、なかなか難しいことだということに気付いた。

中には、俳句の実作において、虚というものを認めない人も居るだろうし、仮に虚を認めたとしても、それがどの程度まで許されるのかという具体論にまで発展しかねないからである。

とにかく、あまり取り越し苦労しても仕方がないので、今回は鬼之介の俳句実作における主観的な立場でこのテーマを語ってみたいと思うので、誤解の無いようお願いしておく。

［実の俳句と虚の俳句］

実＝本当のこと＝事実、虚＝事実でないこと。これが国語辞典におけるまことに簡潔に解説であるが、俳句に当てはめてみると、実の俳句は、事実だけの内容即ち、作者が実際に見たものや聞いたこと、体験したことなどを句材にして詠んだ俳句ということになる。一方の虚の俳句は、事実でないこと即ち、見たことも聞いたこともなく、また、体験したこともない事柄を句材にして詠んだ俳句ということになる。

果して、俳句は実だけで成り立つものだろうか。誰しも、実の句材だけで読み手の心を揺さぶるような俳句を詠むのは難しかろうし、たとえそれに挑戦したとしても、長続きはしないだろう。花鳥諷詠論にしても、観たものを人の心を介して詠むのだから、意識しなくても、自ずと虚の部分が入り込むのを防げないのではないか。

［俳句における虚の必要性］

前項で述べたように、俳句には当然虚の部分があって然るべきだと思うし、虚の介在によって読み手の心を摑む俳句になるのだと思う。料理に譬えれば、実は食材であり、虚は調味料・香辛料である。

ここまで書けば、講師が皆さんに何を言いたいのかを解ってもらえると思うが、俳句にとっては虚は必要不可欠なものだということである。

［俳句の虚とは何か］

俳句の虚は、①脚色　②掏り替え　③創作　の三つに分類できる。

①＝観た物や景色などを大きく詠んだり想像して詠む、見た

ことや聞いたことを大袈裟に詠む、など。
②＝出会った人が男であったのを女に替えて詠むなど、事実とは異なるものに替えて詠む。
③＝自分が見たこと聞いたこと体験したことなどの事柄を素材にして、自分の思いや希望・理想を恰も実のように創作する。←小説俳句。

［俳句における実と虚の割合］

人それぞれ個性・人格が異なるので、一概にその割合を示すのは難しいが、一般的には、実対虚＝7対3か6対4くらいが適当かと思うが、如何なものだろう。何となくウイスキーか焼酎の話題になってしまったようだが、そのように意識して作句できるものではないし、すべきではない。あくまでも、個々の俳句を分析して得られる答であろう。鬼之介俳句で言えば、虚が100％の創作俳句＝小説俳句も多作している。

［虚を利用して俳句に面白味を］

水明誌の選をしていて感じることは、実にとらわれ過ぎた身辺俳句が多いことで、共感が得られない。自己の句材を豊富にするためにも、虚の部分を如何に上手く取り入れるかを考えられることをお勧めする。鬼之介を唸らせるような面白い俳句の輩出を期待している。虚を上手に使うことで、俳句の幅と奥行きが深まると思う。

［虚を取り入れた俳句の実例］〈鬼之介俳句より〉

虚①

選りすぐる石で春濤ずたずたに
葦原へ手柄を立てに蟻の列
みな胸にもみぢを挿して紅葉党
寒潮に咬まれたくなく汽車走る
初富士を借景にして麹蔵

虚②

春灯の影を横切るチェスの馬
朽ちてなほ王の剣ぞ青嵐
五色豆を線路に並べ秋うらら
天高し火焔太鼓の二打三打
北斎の浪の形の初景色

虚③

ほどのよき御召列車の春燈
「針千本」の小指はかなき薄暑の夜
紅葉かつ散る宿（しゆく）よ彼の日の和宮
軽石で踵を磨く一葉忌
初夢や辨財天をエスコート

以上をもって本稿を閉じるが、会員諸氏の俳句実作にいくらかでもお役に立てば幸いである。俳句を書いているのは、別人格の自分だと思って脱皮してほしい。俳号を持つことによって、別人格の自分が生まれる。

私は、俳句を初めて二年目に、父から貰った俳号・飛鷺子（ひろし）を鬼之介に改め、それから俳句が大飛躍した。

「季語に付く助詞　季語を導く助詞」

～水明塾雑記その二～

網野　月を

俳句を作る上で助詞を上手に使うことが一つの秘訣であろうかと思います。助詞に拠る主語や目的語の明示が出来ますし、場合によっては省略を可能にして、いわゆる余韻を作り出すことも出来るからです。

少し違った側面から助詞を考えてみましょう。ここでは広く世界の言語世界を想定してみます。世界の言語は、助詞の働きという側面から考えてみると〈膠着語〉〈屈折語〉〈独立語〉の三種類に大別できます。その中で〈膠着語〉は助詞が自立語に膠着する（付く）ことで主格や目的格を表わすことができます。日本語は〈膠着語〉の代表的言語です。

助詞には「自立語について文節を作る」機能、「文節と文節の関係性を示す」機能、「付いた語に意味を付す」機能などがあります。無論、韻文である俳句にもこれらの機能を使用することが出来ます。俳句の季語に特化してみると、季語に付いてこれらの機能を発揮する助詞と、これらの機能を発揮して季語を導き出す助詞があるようです。季語に付くことのできる助詞の主なものは「や」「かな」「の」「から」「は」「を」「に」「て」でしょう。また季語を導く助詞の主なものは「や（よ）」「ぞ」「の」でしょうか。但し、季語は必ずしも助詞とのみ関係性を持っているわけではありません。（季語は様々な方法で句中に配置されますが、切れの後に置かれたりするのもその一例です。）

さてここで、助詞の種類を概観しておきましょう。細かいことですので、ザっとですよ。助詞には、先ず「格助詞」（「が」「の」「を」「に」「へ」「と」「や」「より」「から」「で」「にて」）を挙げなくてはなりません。主格や目的格を明示するという助詞の最重要な働きを示しています。

次に「接続助詞」（「ば」「と」「ても」「から」「ので」「が」「けれど」「のに」「て」「し」「ながら」「たり」「なり」「ところ（が）」「ところで」「ものの」「ものを」「とも」「して」「で」「に」「を」「も」「ど」「ども」「ながら」「ものは」「つつ」「や」「ものから」など）ですね。文字通り前後の語句をある関係性を持たせてつなぎ合わせる働きをします。

第三が「副助詞」（「など」「まで」「ばかり」「ほど」「きり」「くらい」「だけ」「なり」「やら」「か」「だに」「すら」「さへ」「のみ」「まで」「とかや」）です。

そして第四が、「係助詞」（「は」「も」「でも」「こそ」「さえ」「だって」「しか」「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」）です。作文でよく使用する「私は…」の「は」は係助詞と呼ばれています。

第五は、「終助詞」（「な（あ）」「や」「よ」「わ」「こと」「ぞ」「ぜ」「とも」「もの」「けれど」「か」「の」「で（て）」「かしら」「けど（も）」「え（い）」「かも」「かな」「が」「がも」「がな」「ばや」「なむ」「ね」「に」「こそ」「かし」）です。

最後に「間投助詞」（「な」「ね」「さ」「よ」「や」「し」「を」「ろ」「ゐ」）を挙げることが出来ます。（※文法書によっては多少、分類が異なるようです。）

以上のような解説では何が何だか返って混乱するばかりだとおっしゃる方もお有りかと思いますので、具体的な助詞を見ながら話を進めてみましょう。先の六種類の助詞の中で例えば「の」は格助詞、終助詞に跨っていますね。「に」に至っては格助詞、接続助詞、終助詞に記してあります。これでは分かりずらいですね。そこで次には主要な助詞を挙げて用例を示しながら検討してみましょう。先ずは「の」です。

◆「の」の使用は俳句では欠かせません。「の」を使いこなすことは俳句上達の鍵の一つである、と言っても過言ではありません。次に七つの用例を示してみましょう。

①格助詞（連体格）（連体修飾語）
東の空、懐かしのメロディー、私の学校

②主格の呈示（格助詞）
私の卒業した学校、私の経営する学校

③体言代用（格助詞）
それは古いのです、喜ぶのはまだ早い

④並列の意味（格助詞）
行くの行かないのとなかなか決まらない

⑤格助詞（連用格）（文語のみで使用します）（→続く用言に対して主語の呈示）
白雲の絶えて（「……のように」「……の如く」の意味）

⑥逆説接続の意味
「……ものの……」

⑦その他（終助詞）（疑問、断定の意味）
そうするの！

以上です。「の」は音を汚しませんし、重ねても然程、邪魔になりません。先ずは「の」を補って句を完成してみるのも一つの手かもしれませんね。

◆「を」の使用は実は、あまり披瀝したくありません。最近私が良く使用する作法でもあるからです。（笑い！）

①格助詞（連用格）
花を見る（動作の対象）
川を渡る（場所）（自動詞の連用修飾語）
ここで三年を過ごした（時間）
十時に成田空港を発つ（出発点）
西を向く（方向）
母を別る（相手）（文語のみ、今では稀な表現か？）

「を」自体を省略することのできる場合がありますね。例えば「花見る」「川渡る」「西向く」などです。この場合は音数を減らすことが出来ますが、「花を」で見たことにならないでしょうか？「西を」で向いていることにならないでし

ようか？目的格であることを明示して（呈示・格助詞）、動詞を省略することも出来るのです。「を」を省略するよりも、動詞を省略すること方がより余韻を感じることになりませんか？

②その他（間投助詞・接続助詞）

◆「に」の使用は、要注意です。細心の注意を払って使用してください。とかく説明（散文）的になり易く、他の助詞と併用すれば尚更に散文に急接近するきらいがあります。

①格助詞（連用格）

山に住む（場所）

三時に着く（時間）

浦和駅に着く（帰着点）

還暦になる（結果）

強風に壊れた家屋（原因・理由）

調査に赴く（目的）

先生に会う（対象）

生徒に英語を教える（相手）

母に土産を届けさせる（目標）（使役）

波にさらわれる（原因）（使役）

父親に肖る（比較・対比）

雪に月に花の眺めは……（並列・添加）

以上の「調査に赴く」は「調査へ赴く」に変えられますね。また「父親に肖る」は文脈によっては工夫の余地があるでしょう。「に」の場合には、前述の「を」の後続する動詞の省略の手法は効き目がありません。「に」は目的格の呈示の際に動詞を省略した場合、省略した動詞が曖昧になりやすいのです。動詞の省略は極めて限定的になります。

②その他（接続助詞・終助詞）

◆「や」の使用については用例を挙げる必要はないでしょう。

①切れ字（格助詞）

②並立の助詞

③その他（間投助詞・係助詞・接続助詞・終助詞）

◆「かな」の使用についても用例は必要ないでしょう。

①切れ字（終助詞）

◆「ばかり」の使用は避けた方が無難です。

①体言と活用語の終止形に付く（副助詞）

歳時記を見てみてください。各季語には例句というのが数句挙げられていると思います。「ばかり」の使用されている句が見当たりませんね。それが全てを物語っています。

◆「より」の使用には、注意点があります。

①格助詞（連用格）

誰よりも背が高い（比較）

あきらめるより仕方ない（限定）

比較の意味を持つと、句意が曖昧になり易いですね。

②時空間（動作、事物、人物なども）の起点を表す（文語のみで使用します）

関西よりいらっしゃった（起点）（文語的表現）

木の間よりもれる光（経由）

徒より詣でて（手段・方法）（古文的表現）
……別れより暁ばかり……（原因・理由）（古文的表現）
名前を聴くより早く（即時）

時空間を表現する「より」は時に時間の「より」なのか？空間の「より」なのか判然としないことがあります。曖昧さを避けないと、これも句意が固定できないことになります。

③その他（形容詞、形容動詞に付く副詞）
より安全な場所

◆「で」の使用は極力避けた方がよいでしょう。

①目的格に付く（格助詞）（口語）
川で遊ぶ（場所）
午前中で終わる（時間）
土で作る（手段・材料）
頭痛で休む（原因・理由）

②その他

音韻も悪いですし、第一説明的の極みになってしまいます。歳時記の例句を引き合いに出しましたが、角川書店編『俳句歳時記（第五版）冬』の「時候」には三八四句の例句が載っています。内、「で」の使用が見られる例句は五句です。◆「て」の使用にも注意が必要です。

①接続助詞
卒業して就職した（継続、推移・順接）
弱そうに見えて実は強い（逆接）
雨が降って涼しくなった（原因・理由）
安くて美味い（並列）

②動詞と補助的用言の接続
歩いている（文語的表現）

③接続的役割（↑接続助詞）

④終助詞

特に③の接続的役割を有する場合の「て」は連用修飾語として何にでも付いて、何をも導き出してしまう可能性があります。特に中七の最後に「……て」を用いれば下五はどのような語句でも置くことが可能です。その場合は、俳句的表現の世界を壊している可能性があるということでもあります。

◆「も」の使用は絶対要注意です。

①接続助詞（確定の逆説の意味）
思ってもいらっしゃらない

②係助詞
今日も雨だ（同趣・同類から一つを示す）
先月も今月も黒字だ（並列）
十万円も取られた（強意）
良くも集めたもんだねえ（感動）

並列の「も」は、特にどちらかを省略（例えば「今月は黒字だ」と使用）した場合に詩興を損ないます。ごく少数が良い「も」であり、九十九パーセントが悪い「も」です。

水明塾では他に、クイズを解いたり、「水明誌」から取材した実例集を見ましたが、小欄では省略します。

水明塾（令和二年十月二十七日）の講座内容を当日出席出来なかった会員の皆様に再録しました。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

十月号

落ちさうで落ちぬ離宮の桐一葉

詠むには難しい季語「桐一葉」、中国の古典『淮南子』の〝桐一葉落ちて天下の秋を知る〟に由来とも坪内逍遥の戯曲に由来するとも言われる。季語の由来は兎も角、この句の極みは「離宮」にある。落ちさうで落ちぬとの措辞にそこに住む人の未練、執着を読み取ってしまう。

平曲や雲に隠るる居待月

平曲は平家物語を曲節をつけて琵琶の伴奏で語るもの、タイトルの「平家琵琶」と同義である。軍記物語に分類される平家物語、平家の栄枯盛衰を平曲として琵琶法師によって語られることによって後代の文学や歌舞謡曲に多大な影響を及ぼした。句は平曲の哀調をベースに陰暦八月十八日の夜の月を詠む。上五の切れを受けての中七と季語の座り、真似ることが叶わぬ作者独特の俳句である。

彼の歌の一本杉のある花野

「もはや戦後ではない」と書かれた国の経済白書、街は未だ戦後の混乱を引きずっていた。彼の歌は紛れもなく「別れの一本杉」であろう。「泣けた泣けた」の歌い出し、面皰面で大声で歌っていた。戦後の辛酸をなめた父が「男は泣くな」と真顔で嗜め、その父を横で母が笑っていた。

上五中七で歌の中の一本杉であることを暗示、言わば虚の設定である。しかし花野の中の一本杉が確かに見える。作者独特の巧みな手法である。

抜手切るやうに芒の原を行く

抜き手は泳法の一つ。慣用的に人生の難関を乗り切ってゆくのにもたとえられる。長い人生の中で難関を乗り切った経験、あるいは今難関に直面しているのかも知れない。勿論、泳法と解しても大きな芒原の叙景ではある。解釈は読み手の自由、鑑賞の楽しみでもある。

四阿にその名雅よつづれさせ

蟋蟀は種類が多く日本に九十種程を数える。「つづれさせ」はその代表格で二センチほどの中型、夜にリーリーと感傷をそそる鳴き方がその名の由来と言う。歳時記によれば蟋蟀と螽斯は平安時代には名前が逆に用いられていたが、つづれさ

せの呼称は平安人以来のものと言う。仮名書きの名称、その響きは殿上びとの雅言の様でもある。句を音読しその雅びを改めて実感する。

十一月号

白無垢の花嫁に添ふ秋の風

一読して懐かしい感慨に満たされる。農村ではその年の収穫を終えた秋が婚礼の時期でもあった。田の字の間取りの仕切りを取り払っての挙式が多かった。当時貸衣装などある筈はないのだが、やはり花嫁は白無垢であったように思う。挙式の形も次第に洋風化しジューンブライドに肖って六月に教会の挙式が多いようである。ギリシャ神話で結婚や出産を司る女神ジュノに因んだ六月と言うのは式場のパンフレットの話。嘘とは言わないが、六月は畑作が中心の欧米では収穫を終えた爽やかな時期でもある。「秋の風」に収穫を終えた安堵感と爽やかさを感じ取る。

大花野放歌高吟ゆるされよ

中七「放歌高吟」から旧制高校の蛮から気風を読み取ってしまう。作者と同世代として高揚した気分を共感する。夜の街頭でない分健康的である。大花野にある青春像、同じ昭和世代でも数年後であればフォークダンス、その十年後であればフォークソングであろうか。

袖濡らす夜露も粋に女坂

作者らしい粋な句である。山の坂では断じてない。どこか社寺の参道に違いない。袖濡らすの措辞からは京の何処かの様でもあるが生憎京には疎い。都内であれば増上寺から愛宕神社に至る坂が頭を過る。男坂は馬で駈け上った武勇で有名な石段だが女坂は静かでそれなりの野趣がある。神谷町に抜ければそれなりの店もある。しかしそれではコースが逆、食事を終えたほろ酔いの二人が夜露の下りた女坂をそぞろ歩きを楽しんでいる。詮索を楽しませてくれる句である。

創作案山子まさに「田舎のプレスリー」

案山子の衣装と言えば絣地の筒袖の野良着が普通であった。農家の主が創意工夫を凝らして作った案山子はジーンズにギターでも抱えていたのだろうか。四十年も昔に「俺は田舎のプレスリー」と歌った津軽出身の歌手、今も青森在住の歌手で作詞作曲家に思い至る。

プレスリーはロックンロールで世界に名を馳せた大歌手。初期のブルースも素晴らしい。アメリカ南部メンフィスには邸内にプロペラの自家用機を置く大邸宅がミュージアムとして残る。その街に青森の蔵元が出した銘酒「桃川」の名を冠した日本料理店があった。四十年前のあの歌が出店の機縁であったのは間違いない。大きくわき道に逸れた鑑賞、それも俳句の楽しみである。

硯箱

◆季音十一月　井口俊晴

秋の朝木目艶めく黄楊の櫛　境　延昭

寝苦しかった夏の日が過ぎ、爽やかな秋を実感する朝、ふと鏡台に目をやると、妻が結婚以来ずっと使っている柘植の櫛があった。柘植は硬く緻密な材で、万葉集にも柘植の櫛が詠まれている。黄褐色の櫛は黒髪を梳かし、使い込むほどに味わいが増す。その歯は長い年月の間にも欠けることなく、使い込むほどに艶を増し、今では飴色の光沢を持ち、使う人の色気さえ感じるほどである。

新涼や埴輪は口を縦に開け　山中　順子

涼しい風が吹き渡る初秋の空は抜けるように青い。好天に誘われ、埼玉県行田市を訪ねると、大きな古墳が九つもあった。古墳をぐるりと囲んで、杭のような円筒埴輪が据えられ、権力者を葬った当時の様子を知ることが出来た。傍には服や鎧を着た人物埴輪も置かれている。口を縦に大きく開け、歌っているのか、それとも叫んでいるのか、爽やかな秋の空気を胸いっぱいに吸い込んで、命あふれる様子である。

芋虫に夜を睥睨のちからあり　吉住　光弥

散歩をしていると芋虫に出くわすことがある。路地の端から端へ、車が来るというのに、悠々と渡ろうとしている。そうかと思えば、生け垣の葉にへばりつき、なお上に登ろうと脚を動かしている。それが小さいのならいいが、親指ほどの大きさになると、さすがにタジタジとなる。しかも、角をはやしていたり、びっくり目玉のような模様があるとなると、たかが芋虫と言えど、かなり強面、あたりを睨みつけるような迫力がある。

蓑虫の蓑を濡らして雨あがる　森川　義子

さっきまで晴れていた空が暗くなったと思ったら、雨がざっと降ってきた。樹々の枝を揺らし、ひとしきり降ると、まるで嘘のように止み、お日様が顔を見せた。サンダルをつっかけ玄関に出てみると、きのう生け垣の隅に見付けた蓑虫が、

強い雨に叩き落とされもせず、無事ぶら下がっていた。さすがに濡れて雫が垂れるほどだったが、蓑の中の住人は何ともない様子だ。ちっぽけな虫の暮らしに見た俳諧の世界…。

夫逝きて稲刈る音の一つ消え　　井上　燈女

稲穂が重そうに垂れ、豊の秋という言葉がぴったりの日々。刈り入れの鎌を手に、黄金色した穂波に身を沈める。農家にとって、今こそ苦労が報われる時である。でも、この寂しさはどうしようもない。去年は仲良く稲刈りをした夫が逝ってしまった。ザッザッ、ザッザッとリズミカルに刈る刃音が消え、私一人が立てる音しかない。「音の一つ消え」という言葉の切なさが身に沁みる。

撫子やぬれし遊女の墓いくつ　　松本　光子

最近は「なでしこジャパン」でお馴染みになってしまったが、撫子は「秋の七草」として知られ、万葉の昔から女性の優しさ、美しさをたたえる身近な存在だった。もっぱら日当たりの良い野原に咲き乱れている。作者も旅先でこの可憐な花を見つけたのだろう。撫子が咲く傍らには、露に濡れ、苔むした小さな墓が並んでいた。見ればつらい運命に翻弄された遊女のものらしい名が刻まれていた。

落日へ野武士走るか鬼やんま　　松井由紀子

今まさに沈まんとしている太陽に向かって、鬼やんまが飛んで行く。なんだ、トンボが飛んでいるだけかと言ってはいけない。「鬼やんま」は日本最大のトンボで、体長十センチを超すものもあり、最近はめったなことでは見ることが出来なくなっている。怖そうな顔をして、体の黒と黄色の縞模様が鬼の褌を思わせる。トンボはなぜか武士に愛され、前立てという兜の飾りにされたり、「蜻蛉切」という名高い槍があったりもする。ここでは、戦国時代の武将ではなく、野武士という、もっと荒々しい武士に例えられている。

万年青の実己も犬も年老いて　　福田　千春

万年青は見てのとおり「いつも青々と色褪せず、縁起が良い」と言われ、「長寿」「母性の愛」などの花言葉もある。秋が深まるころ、赤い実を束になった葉の中央に、まるで包むようにつける。それが母の愛と呼ばれる所以らしい。愛犬家の作者は、仔犬を自分の子供のように愛し、毎日の散歩を欠かさず、一緒になって遊び、病気をすれば病院に通った。いつしか仔犬は老犬となり、自分も歳をとってしまった。深い自省と感慨に満ちた句である。

水明創刊90周年
記念全国大会の記

五明　昇

水明創刊九〇周年記念全国大会が第五代山本鬼之介主宰の下、十一月九日ロイヤルパインズホテル浦和を会場に開催され、七十九名の参加を得て盛会裡に終了した。本大会は当初六月二十九日に祝賀会とともに盛大に挙行の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期、対象を全国大会のみに絞り万全な感染対策を講じての開催となった。

司会　五明　昇

開会のことば　網野月を

これより創刊九〇周年および令和二年度の水明全国大会を開会いたします。大会は当初予定を四カ月余り延期、祝賀会も後日改めてということになりました。水明四賞並びに九〇周年記念特別作品の栄えある受賞者の皆さんに心からお祝いを申し上げます。水明誌友・同人の俳句への思いは年々強くなっておりますが、大会はその思いを確認する場でもあります。九〇周年を経て、九五周年、一〇〇周年も見えてきました。水明が益々大きく羽搏けるよう願って止みません。

主宰挨拶

九〇周年記念全国大会に大勢の方にご参加頂き、ありがとうございました。俳句の世界ではすでに冬季に入っておりますが、本日は季節的には素晴らしい「秋晴」で、待ちに待った大会を祝福してくれているようです。

昨年七月の主宰として初めての大会では水明の財政逼迫に心を痛めておりましたが、皆さんのご協力で何とか軌道に乗

せることが出来ました。水明俳句会の運営は皆さんからの誌代・同人費の支払いに加えて、発展基金からの支援金によって賄われており、引き続きご協力をお願いいたします。

水明誌の九〇周年記念号は編集部の努力と会員の協力によって素晴らしい内容となりました。水明九〇年の歴史が余す所なく綴られていますので、先人の足跡を丹念に読み取って頂きたいと思います。記念事業の一環として立ち上げた水明ホームページは俳句界随一の更新頻度を誇り、最近では会員の加入にも力を発揮するようになりました。関係者のご尽力に心から感謝しています。

折角の機会なのでいくつかのお願いをしておきます。第一のお願いは結社活動の結晶である水明誌を隈なく読んで頂きたいということです。自分の作品のみならず他の人の作品もしっかり鑑賞する一方、様々な案内やお願いにもしっかりと目を通して下さい。また投稿・投句は心を込めて丁寧に書くよう努めましょう。さらに俳句初心者講座への不要歳時記の寄贈や、カレンダー購入などの事業活動にも積極的な協力をお願いします。

全国大会に続く九〇周年記念祝賀会は、コロナ禍が一段落したら必ず開催し、皆さんと喜びを分かち合いたいと思います。九〇周年の後には九五周年、百周年も巡ってきます。新た目標に向けて、全員が力を合わせて前進しましょう。

主宰の花束贈呈　　**星野和葉**

物故者への黙祷

対象者は加藤草太郎、吉澤純枝さんのお二人。

感謝状贈呈

九〇周年を機に、長年にわたり水明の運営にお力添えを賜った五名の方々に山本主宰より感謝状と金一封を贈呈した。

水明発行所大家　　本田和久氏
㈱プライムインフォメーション代表取締役社長　　直井晴美氏
㈲中央美版代表取締役社長　　直井弘氏
ロイヤルパインズホテル浦和　　鴨居勝氏
元水明俳句会普及推進部　　和田隆一氏

令和元年水明会計報告　　会計　日髙道を

水明俳句会の令和元年度決算・令和二年度予算、並びに水明発展基金の令和元年度収支状況が簡明に報告され、拍手で承認された。

水明四賞授賞

（水明賞）　正木萬蝶　　近藤徹平　　大塚茂子
（季音賞）　大場順子　　山田美佐尾　　森川義子
（かな女賞）　矢作水尾
（新珠賞）　日髙道を　　染谷正信　　梅澤輝翠

九〇周年記念特別作品表彰

（俳句部門）　正賞　井口俊晴
準賞　近藤徹平、保坂翔太
佳作　池田雅夫、正木萬蝶、青木鶴城
（エッセイ部門）　準賞　青木鶴城　佳作　橋本京子

―　休　憩　―

兼題句八組以上投句者（披講　五明　昇）

一三八名の投句者中、八組（一六句）以上の投句者五〇名に賞品のクオカードが贈られた。投句最高は四五組（九〇句）。

新季音同人・新同人委嘱状授与

新季音同人　正木萬蝶　近藤徹平　大塚茂子
石田慶子　熊倉千重子　河野はるみ
下川光子　田中章嘉　飛永　鼓
宮崎チアキ
新　同　人　飯田忠男　川村　治　齋藤みよ
佐藤克之　菅原卓郎　杉浦理恵
鈴木藻好　武田重子　千坂平通
外村紀子　仲田利子　湯浅　和

祝電、ご芳志の披露　茂木和子

―　休　憩　―

兼題主宰選句及び表彰　披講　五明　昇

秀逸以上の全句を披講。三極（天・地・人）には色紙、特選五二句には小屏風（中型）、秀逸八三句には小屏風（小型）に揮毫された主宰作品が賞品として授与された。

兼題句高得点者表彰

投句者の全入選句を三極五点、特選三点、秀逸二点、佳作一点として合計、五点以上の六二名に賞品のクオカードが贈られた。最高点は五三点。

主宰講評

全国大会兼題句の三極、特選句を主宰が全句講評された。大会出席者だけが受けられる迫真の講義に全員が熱心に聞き入り、会場に静かな緊張感が走った。

閉会のことば　境　延昭

以上を持ちまして水明創刊九〇周年記念全国大会は滞りなく終了しました。今後は本日の感動を飛躍台に、九五周年、百周年という新たな目標に向け心を一つにして頑張ってゆきましょう。最後に九〇周年記念事業を先頭に立って推進された山本主宰に心より御礼を申し上げ閉会の挨拶といたします。ありがとうございました。

三本締め

水明の印半纏を纏った役員五名が壇上に並び、主宰の拍子木に合せて、水明の益々の発展を祈念する三本締めで大会を終了した。

暑い熊谷に熱い句会を！

（熊谷句会から受賞者続く）

近藤徹平

本年の全国大会で、熊谷句会から大塚茂子と不肖私が水明賞の栄に浴し、一昨年福田藤十郎君、昨年加藤草太郎さんの受賞に続いた。山本鬼之介主宰始め関係各位に感謝申し上げる。

熊谷句会は藤十郎君が平成二十四年水明誌九月号通信欄に投稿した「暑い熊谷に熱い句会を」を読んだ小林萬二郎さんと草太郎さんが協力し、平成二十五年四月熊谷市で発足した。私も小中高同級生の藤十郎君に誘われ直ちに参加した。当初は初心者が殆どで、萬二郎さん、藤十郎君、草太郎さんの人柄の御蔭で俳句に引き込まれた。同年八月に星野光二前主宰を選者に迎え本格的に句会となる。これ迄独自に五回の吟行と平成三十年三月本部主催熊谷吟行の裏方も受持った。

同年四月に熊谷句会満五周年記念句集「熊谷草」を刊行。現在萬二郎さんは高齢、藤十郎君は体調、草太郎さんは急逝のため退会されたが、これまでの尽力に会員一同心より感謝申上げたい。

俳句四季大賞受賞記念40句 蓬田紀枝子

最近の名句集を探る——座談会

大石悦子『百囀』
藤本美和子『冬泉』
渡辺誠一郎『赫赫』

齋藤愼爾
堀田季何
津髙里永子
司会◎筑紫磐井

巻頭三句
稲畑汀子
宇多喜代子
大串 章

宮坂静生
中村和弘
有馬朗人

俳句と短歌の10作競詠
高野ムツオ
三枝浩樹

その時、俳句手帳
江崎紀和子

今月の筆
依田善朗
田中亜美

好評連載
南 伸坊 猫の俳句
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西 朋 俳句へのまなざし
神作研一 手のひらの江戸——古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
酒井佐忠 本の窓辺
二ノ宮一雄 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2021年1月号
12月20日発売
定価1000円（税込）

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音雪

石榴　椎野美代子

モンローの唇ほどや石榴笑む
石榴落つ北よりワシコフの叫び
石榴割れる村尋（と）めゆく師に逢はむ
訪へば石榴笑つてゐてお留守
新色の口紅欲しき石榴熟る

立冬　島津初花

祈りつつ土器飛ばす紅葉山
観音の面掠めて紅葉映ゆ
雁が音やむらさき色の空遠く
白猫や時雨の闇を右往左往
立冬の雨の冷たき通夜帰り

北山初しぐれ　鈴木康世

磨き丸太を濡らす北山初しぐれ
吉原を粋な傘くる初しぐれ
物語の羽衣の松しぐれけり
しぐるるや北向観音供華一花
富士映す田貫湖けぶる夕時雨

神の旅　田寺玲子

蹄あと消す風紋や神の旅
神苑の日矢の金色神の留守
神送り神話の島の落暉燦
小春日やベンチに白き猫ねむる
冬うらら馬柵につながるブルドッグ

背凭れ　永野史代

もう振り向かぬことに決め返り花
来る筈のなき訪れや返り花
浅草に古りし髪結ひ返り花
色鳥来墓石のぬくみ撫でをれば
夜寒かな背凭れのなき椅子にかけ

六方詞　西山貴美子

一の酉奴詞（やつことば）でほじやきけり
名代鮨訪ふ小春日の団子坂
ゆくりなくも出逢ふ時雨の汐見坂
初時雨逢瀬の涙（なだ）のさうさうと
A列車で行かう年越しジャズライブ

冬はじめ　波多野寿子

山茶花や歌ふ恋唄声かすれ
さはやかな医師の触診冬うらら
まだ緩き風のささやく冬はじめ
外堀に流れて美しき散り紅葉
冬茜城に残りし火縄銃

心の内　星野和葉

故郷に友ありてこそきりたんぽ
さらけ出す心の内をきりたんぽ
いつの間に愚痴が惚気にきりたんぽ
朝摘みを選り分けをりぬ頬被
ゆつたりとアールグレイを霜の夜

袖垣　茂木和子

入れ替はる運転席や銀杏散る
起立着席紅葉明かりの硝子窓
袖垣に茶の花咲かす保育園
幼な子の瞳まん丸茶が咲けり
茶の咲きて蕊金色に広げけり

海鳥　矢作水尾

初霜の纜白し夜明かな
ふくらんで並ぶ海鳥冬隣
合流の渦に巻かるる朴落葉
蓑虫を揺らしてみたる無聊かな
秋夕焼匂ひをたたむ割烹着

冬の薔薇　山中みどり

冬晴や神輿の似合ふ男逝く
担半纏の遺影に供ふ冬の薔薇
棺運ぶ揃半纏冬ぬくし
柔らかき夫の爪切るシクラメン
炎の色のポインセチアを購ひぬ

一炊の夢　由良ゆら女

夕闇に魔女の出没神の留守
洗ひ場に朱の椀一つ一葉忌
湯屋のれん過ぎて湯の香や一葉忌
鼠のこまくら返らぬ悔ひを夜の枕
米寿とて一炊の夢浮寝鳥

夜寒　吉住光弥

実石榴の数の裂けるは烽火めく
実石榴裂けおばば昔の接吻（キス）まねる
切干の百の変身母から娘に
茶の花や菩薩の半跏思惟像
居る筈もなき「かあさん」とよぶ夜寒

時には曲がる　網野月を

直線も時には曲がる今朝の冬
レントゲンに乳は写らず桃青忌
顳顬の力を抜いて冬暖か
小春日や泣いた赤おに読み聞かす
年末ジャンボ外れる前の十億円

木洩れ日　石井喜恵

木洩れ日や手に取る落葉踏む落葉
逢ふといふ密かなること銀杏散る
赤赤と群れて淋しき曼珠沙華
稽田に風の紡ぎし花穂揺るる
城址いま無音の闇やざくろ爆ず

的射る瞳　大橋廸代

神門の修復せかす時雨月
初霜月百の白帆の動かざる
閉ぢ際の一花の香気神無月
白息やきりり的射る瞳となりぬ
ひめつばき絵解きの僧の太り肉

棟梁　石山かつ子

百年を継ぐ棟梁に冬の虹
クッキーに継粉の残る文化の日
初霜や芋の葉火傷したやうな
北風や叱咤爆笑学習塾
やつちや場の午後はがらんと冬近し

順送り　大村節代

色鳥の軽き羽音に双眼鏡
稽田に神の刷きたるはぐれ雲
陣痛を一緒に堪ふる神の留守
冬座敷和服の膝を順送り
香を薫き茶の花飾りふと浄土

津軽人　栢尾さく子

天高し走れ無冠の競走馬
藁塚作る声の大きな津軽人
満月や秘めごとあれば胸庇ふ
耳鳴りに混じる虫の音夜の厨
月光に濡れ髪を振る彼岸花

時雨忌　菊池ひろこ

時雨忌や漁港に立てばスパイめく
曲り家に熟睡したり芭蕉の忌
芭蕉忌や上五を花に変へむとす
サル山に植樹のすすむ秋時雨
光り合ふフェイスシールド大枯野

止め椀　五明昇

旅そぞろ目指すは越の新走り
止め椀に温もるこころ旅夜寒
飛石は着物の歩幅初しぐれ
権禰宜が体温測る七五三
星近く山の出湯の牡丹鍋

米一俵の境　延昭

穐田に米一俵の話など
石榴裂く蜂起の狼煙ありし里
相伝の刀(とう)の刃毀れ蓼の花
秋黴雨酒豪に効かぬ痛み止め
うしろから逼る靴音夜の寒し

季音月

我が道　小倉倭子

初紅葉一生分の一日燃ゆ
紅葉山へ突つ込んでゆくマイウェイ
決断の黄葉に記す本音の句
さすらふも好きな俳句や芭蕉の忌
継続を養ふ力寒卵

眉掃き　丸山マスミ

山間の穭田縫うて郵便夫
眉掃きの和毛いとほし翁の忌
引き裂きし反故に未練や桃青忌
席入り待つ膝に山茶花二三片（ふたみひら）
頬被解いて小昼（こびる）を木挽小屋

初しぐれ　藤澤喜久

初しぐれ沙金のやうに降りはじむ
ねねの道尋ねて逢ふも初しぐれ
初しぐれ祖母の気性の撥捌き
初しぐれ酒場詩人の一句かな
マスクして吐く息もなき副都心

政　鳥羽和風

鰤供ふ浦辺の神の政
産土の杜に灯が点く冬至かな
幾度も冬至重ねて八十路坂
レッドカードポインセチアにある熱気
娘等の蜜柑に立つる爪の色

大原女　大場順子

音もなく夜寒の膝に猫が乗る
石榴爆ぜいざ鎌倉の切通し
枯山水の一隅灯し石蕗の花
初時雨水の匂ひの大原女
初時雨女人高野の塔赤し

道東の旅　森本早苗

神の子池の神秘を叩く初時雨
冬霧の国後島（くなしり）へ打つ鐘を打つ
丹頂の群れを遠目の鶴見台
大湿原の冬夕焼けを急ぐ鳥
茹でてなほ花咲蟹の威厳かな

石蕗の花　高島寛治

書き出しでつまづく文の夜寒かな
石榴割れ一部始終を語り出す
冬めくや五百羅漢の凭れあふ
さびれたる庭に一景石蕗の花
石蕗の花武士の家系を誇りとす

かな女全集　柚木治子

「くの一」の手裏剣の秘技石蕗の庭
鶴くびに石蕗の黄映ゆる陶器展
時空越ゆかな女全集冬ごもり
冬紅葉哀史を秘むる煉瓦塀
絵具では出せぬ色合ひ冬紅葉

片時雨　森田祥絵

短命の父系は源氏後の月
文殻を小さく焚きし秋思かな
吾が文字のいよよ曖昧そぞろ寒
尻向けて牛曳かれ行く時雨雲
竹林の雨はむらさき片時雨

後瀬山　宇田白鷺

芭蕉読む少年がゐて外は霧
「若狭男」に見せたき紅葉後瀬山（のちせやま）
紅葉して熊川番所暮れ泥む
早よ来いと二度目の電話猪の鍋
冬の蝶日当る方へ這ひゆけり

冬日和　井上燈女

畳の目にそつて掃き出す冬日和
冬日和兄研きゐし大柱
捨て船を抱き込んでゐる枯芒
枯芒だまされさうな道の中
枯芝を総身に踏んで軟らかし

木の葉髪　原田想子

掃き終へて憩う座敷の風は秋
彩づけは冷えに任せて大銀杏
憂さ甘さ一気に大根おろしけり
決断やにはかに解く懐手
まだ櫛に手応へのあり木の葉髪

冬蝶　松宮保人

寄り添ひて土に生きるや彼岸花
老農は背を丸めて峡の霧
秋雨やガラシャが父の供養塔
山城の天主の跡や鷹渡る
冬蝶のたたみし翅の行儀よし

片時雨　森川義子

筆塚の影をすり抜け朴落葉
県境の大河隔つる片時雨
脱ぎ履きの楽な靴買ふ冬はじめ
鈍色の丸薬三粒冬はじめ
冬近し薪を砦に山家かな

鳥の歌　池田雅夫

計画の未だ半ばや十二月
冬の雨夜更けに白くなりゆけり
天辺の雲を枕に山眠る
冬木立空筒抜けに鳥の歌
北風や斜め四十五度の雨

神の留守　井関礼子

朝ウォーク途絶えしままに神の留守
賜りし小春日和を余すなく
冬の月世相憂ふか見え隠れ
柿落葉色彩の美のこよなくて
石蕗の花途行く人とフェンス越し

愛日　渡辺舎人

天金の書読む冬日のオットマン
亡妻に蜜のここだく紅林檎
三つ星はわが家の紋蜜林檎
相槌に噺が太る温め酒
方舟に乗るひとクラス芸術祭

冬の星　山田美佐尾

指先で歌ふシャンソン冬の星
息つめて払ふお習字青蜜柑
初時雨陽明門を烟らせて
新築の家に初霜銀色に
堅炭を焼く老爺の手朴落葉

銀杏散る　十倉和子

銀杏散るかつと見ひらく踏まれ邪鬼
知足かも堂椽に反る朴落葉
踏み入りし深落葉道翁の忌
赤子あやす声の明るき黄落期
古書店のおやぢの呟き聞き流す

紅葉晴　加藤むら子

紅葉晴渡る板橋水唄ふ
会話なく秋夕焼を身に纏ふ
短日の踏切見据える警察車
小春日や乗客二人無人駅
村落に残る数軒落葉焚

茶碗酒　荒井倶子

外股に火男が舞ふ村祭
世話役の爺が小走り秋まつり
ふいご祭茶碗かちりと男衆
神の留守監視カメラが作動中
木の葉降る中を駆け抜くスニーカー

あんぱん　町野広子

秋しぐれ夫へあんぱんクリームパン
秋しぐれ鎧戸堅く銃砲店
拍手のよく響きたる寒い朝
朝寒や身じろぎもせず祈る人
朝寒や婚家の味のおみそ汁

蛇の目傘　松本光子

秋しぐれ一灯淡し縄のれん
秋時雨肩に手をおき蛇の目傘
寺町や仏小肥り秋しぐれ
粗壁の味噌蔵ほのと寒の朝
寒燈の一人は一人の明るさを

初時雨

川崎道子

初時雨駆け込む軒なきニュータウン
初時雨すれちがふ髪むらさきに
鳥渡る最高階のレストラン
木枯や予防接種を予約せり
ドローンでの撮影ぶれる神無月

秋時雨

内田惠子

兼六園の根上りの松秋時雨
運転席の赤いクッション秋時雨
磨かれし敷居の木目新走
色鳥や教会脇の無縁墓地
石蹴りの石の行方を柘榴の実

生を享く

伊藤敦子

熱帯夜世界漫遊深夜便
コロナ禍の真つ只中に生を享く
花芙蓉シャッター固く閉ざさるる
秋の蚊に心の隙を刺されけり
露草の触れもせぬだに露こぼす

初時雨

岡野順子

初時雨ボール投げては考へる
生垣の刈り込み半ば初時雨
初時雨雀の親子チチと去る
おんぶばつたこんなところに初時雨
草叢を見つけて返す初時雨

七五三

西浦千枝子

子の手よりおにぎり転ぶ紅葉山
此処よりは進入禁止柿の里
解禁待つボジョレーヌーボ山積みに
賢くねと宮司より飴七五三
袴の裾踏んでころびぬ七五三

（花欄より）

☆　☆

季音花

冬桜　野口和子

掌に余る秩父の蜂屋柿
菩提寺は山のまた奥木の葉散る
冬隣探し物して小半日
鼻歌とすれ違ひたる小六月
山の気を吸うてまろやか冬桜

初霜の輝き　梅澤佐江

味噌汁の香よ恙無き身よ冬隣
冬を待つ静けき川の鋼色
落葉径すでに踏ん切りつけてをり
彼の日のやうにスペイン坂の落葉雨
いつせいに初霜光り出す野面

冬銀河　井上玲子

胸中にひびく海鳴り冬銀河
残照の汐さす浜辺千鳥群る
瘤を負ふ幹の光陰冬桜
切株に清めの塩や星冴ゆる
小春空今日ある命いとほしむ

七五三　井口俊晴

振袖にピンクのズック七五三
母さんのルージュをつけて七五三
初時雨そぞろ歩きは襟を立て
密と滅乱れるやうに木の葉散る
草紅葉夕日が沈む地平線

山眠る　野平美紗子

疎開地や煙ひと筋山眠る
兄弟と訪ふ父の里山眠る
花八手椅子が二つの理髪店
身不知柿鳥と分け合ふ日和かな
吊し柿雨戸に影の一列に

小春

宮﨑チアキ

「祝七五三」の見事な太字一の宮
小春日や窓開放の体育館
ダンスパーティ小春の風に覗かるる
人気なき園に落葉のセレナーデ
おでん鍋湯気の向かうに明日がある

歯痛

近藤徹平

虫穴に入る芯に蠢く歯痛
霧の幕突いて跳び出すフォグランプ
大輪の菊や蘊蓄尽きぬ夕
チャルメラが通用口に冬隣
穭田に葬列の銅鑼ちぎれ雲

ファーストキス

正木萬蝶

あの辺り黄泉の入口紅葉山
遠く哭く即身仏や翁の忌
時雨忌の宿坊甘露に般若湯
枝折戸を開けて待つひと初時雨
うそ寒しファーストキスはあなたです

ホテルの灯

熊倉千重子

小春の日やたら胸張る袴の子
酔ふほどに本音ちらほらおでん鍋
冬もみぢ城址に八ツ橋赤極む
凍星や湖岸に揺るるホテルの灯
ボール蹴る親子揃ひの赤セーター

凍豆腐

大塚茂子

凍豆腐触るれば痛し夜の浜
虚子・立子眠る鎌倉冬に入る
凝鮒箸こまやかに使ふ夫
人はみな秘密を持ちて枯尾花
富士裾野我がものにして枯芒

かさぶた

石田慶子

芭蕉忌やさしづめ吾もスパイの妻
芭蕉忌や曾良の像ある草加宿
かさぶたの取れる取れない秋の暮
大棚田なんかやさしい鰯雲
迷路めく路地に古井戸返り花

ほそ道

河野はるみ

松並木けふは青空桃青忌
師弟の像の見交はす目と目翁の忌
ほそ道を一里ほど往く翁の日
オリオンに守られ夜汽車ゆるり発つ
荒星の中をさ迷ふ宇宙船

秋から冬へ

下川光子

保育所の泣く子笑ふ子柘榴の実
検索の指先止まる夜の寒し
波音を耳に旅寝の夜寒かな
路地裏に遅き日の射す花八手
旅人の道連れとなり初しぐれ

冬の月

松井由紀子

冬満月零れくるものなにも無く
シャーレの表面張力窓に月
木枯や異相群れゆく石畳
くぐもれば愛告ぐるごとマスク声
夕厨鍋にほとぶる凍豆腐

寒椿

中野彊

すすき原人行けば道開けたり
寒椿隣りいつまで空家かな
寒椿開く小鳥を呼ぶために
菊まつり美しく建つ首里の門
雑踏の鉢を色どる秋の花

花八ッ手

上戸千津子

鳩の群れ紅葉蓆を我がものに
鬼門にて睨みを利かす花八ッ手
待ちに待つた吉報届く今朝の冬
荒れ庭も硝子絵めくや冬紅葉
切干の届き故郷の香り撒く

恋の役

福田千春

往年の女優の恋や返り花
立ち姿に母のおもかげ帰り花
肩寒し添ひ寝の犬の逝きしより
時雨忌や駆足で過ぐ渡月橋
芭蕉忌や目的持たぬ旅の宿

酉の市　田中章嘉

酉の市まづ一葉に会ひに行く
一葉館いづるや今日は一の酉
酉の市和服の男女数多かな
宅配で届く酢茎や友の顔
一人夜はおでんセットで終りとす

秋　菅原知子

芭蕉忌や羽黒山伏修験場
芭蕉忌や鼻緒の切れし藁草履
書き置きをみつけてよりのうそ寒し
庖丁の試し切りしてうそ寒し
秋深し双子の兄弟よく眠る

初霰　飛永鼓

生涯の想ひ出ならむ紅葉狩
紅葉狩足元にまで燃えうつり
発掘の古墳眼下に紅葉山
地に足を踏ん張り迎ふ初霰
立ち止まる新刊コーナー初霰

旅便り　松山清子

朝刊の少し湿りて今朝の冬
雪虫を見たとの北の旅便り
ケバブ食ぶ仲良きふたり木の葉降る
踏石は御影石なり青木の実
夕時雨托鉢僧の足捌き

山茶花　後藤綾子

山茶花の花ひらくより散るを愛で
冬銀河コロナが潰す句作の場
木枯に別れの言葉かきけされ
終演のオペラ口遊む冬の月
熱燗も又良し亡父の手付真似

山粧ふ　宮崎雅訓

入院や紅葉に汚れ無きにしも
癌病棟白衣に薄ら秋の風
然りげ無く病院食に衣被
血圧と血糖値よし秋麗ら
六階の病棟退院山粧ふ

新企画のお知らせ

令和３年から、水明誌上に二つの新企画が誕生しました。皆さんご注目の上、奮ってご参加ください。

【鼓笛集】内容を刷新しました

1．１月号から〔大村節代〕が選者となり、積極的に取り組みます。
2．投句対象者は従来通り水明集欄の同人で、編集部からの依頼によって３句投句していただきます。
3．新たに年間賞を設け、全国大会で授賞します。
4．年間の成績が、夏季競詠と同様に水明賞の選考にも波及しますので、力を傾注してください。

【山紫集】全く新規の企画です

1．選者は〔網野月を〕です。
2．投句対象者は、水明集欄の同人と季音「花」「月」欄の季音同人です。
3．毎月出す兼題で１句投句していただきます。
4．兼題は、毎月水明誌に添付される投句用紙に明記されます。
5．締切りは、他の投句同様に毎月25日です。
6．全国大会で年間賞を授賞します。
7．年間の成績が、夏季競詠と同様に水明賞や季音賞の選考にも波及しますので、力を傾注してください。

主宰　山本鬼之介

現代俳句鑑賞

網野月を

水は音紡ぐ八月十五日　雨宮きぬよ

（『俳壇』11月号・芙蓉より）

真面目に俳句に取り組んでいらっしゃる方の句である。真面目に日本の歴史を見つめる方の句なのである。そして日本人にとって八月十五日は真面目になる日なのである。耳を澄ませば水の音が七十五年の歴史を紡ぎ続けている。戦争と原子力爆弾と終戦は水と切っても切れない関係性を有しているのだ。掲句は五七五のリズムを感じさせながら、そのリズム感を超越しているところに作者の心の在り様を表現しているのである。他に「敗戦忌しづかに道の岐れをり」がある。

風除の椅子に押し込められており　岡田耕治

（『俳壇』11月号・傷口より）

「風除」しているつもりが、いつの間にか「椅子に押し込められて」身動きが取れないでいる。「られて」の受動態と、加えて「おり」での表現されている作者自身の存在が読み取れる。文字数を多く使用して丁寧な表現で描かれていると感じる。心象を超えて心の在り様の微細な描写を試みている。読みての深読みが期待される句である。

残る蜂うしろ歩きにみちびきぬ　安西　篤

（『俳句四季』11月号・巻頭句より）

秋季、もしくは冬季の「蜂」は、俳句においては、自己投影のモティーフになることが多いようである。そして「蜂」に自己を投影させる俳人は、至極勤勉な方が多いように感じているのは筆者だけではないと思われる。掲句の作者然りである。中七の「うしろ歩き」の措辞にも魅かれる。この呼びかけには人間の哀切が滲み出ている。筆者の亡師の句「遅日の象うしろ歩きをしてごらん」を思い出す。

アトリエの壁の曲線ふゆの蝶　篠塚雅世

（『俳句四季』11月号・ふゆの蝶より）

この曲線は何時の間にかついた曲線なのであろうか？はたまた誰かが故意に描いた意味のある曲線なのであろうか？兎に角も「ふゆの蝶」の出現で曲線を改めて意識することとなった作者なのである。形象的な意味合いなのか？存在の意識論的意味合いなのか？はこの十七文字にある情報からだけで

は分からない。他に「尾に知恵を集めてゐたる北きつね」がある。

嘴太鴉ふはつと雪の塔に立つ　黒岩徳将

（『俳句』11月号・嘴太鴉より）

魁偉な嘴太鴉ではある。「ふはつと」では尚更である。そもそも鴉は春夏秋冬新年に存在していて、季語の世界でも同様である。「鴉の巣」は春、「鴉の子」は夏、「別れ鴉」は秋、「寒鴉」は冬。そして新年は「初鴉」であろうか。掲句は冬の季語「雪」のよって冬の季感で詠んでいる。あたり一面「雪」の白の世界に、鴉の黒一点が見事である。

ええそうです私が柿を置きました　赤野四羽

（『俳句』11月号・悪酒より）

口語であり、会話による劇の台詞のようでもあるが、文字化して読者が読み取ると散文でもなくなり、会話でもなくなる。戯曲の台詞の可能性は残るが、だとしたら三文作者の戯曲であろう。独特な抑揚で喋る、まだ新米の若手俳優が目に浮かぶ。しかしながら、これは俳句なのである。何故なら文字にして、俳句的リズムが生じたからである。俳句はリズムと季語、そして俳句的把握と俳句的表現が主な特徴だが、それらは必要十分条件ではないのである。そのうち一つどれかを満たせば俳句に成り得るのである。他に「冬の鳥あなたに戒律なき信仰」がある。

秋の海黙つて陸を押してをり　河内静魚

（『俳句界』11月号・絵本の星より）

「秋の…」は時間が広い表現である。例えば「春の雨」は初春にも晩春にも使用するが、その様態は著しく異なるようだ。「春雨」と「春の雨」を使い分けて、「春雨」を初春に、「春の雨」を晩春に意味分けする俳人もいるほどである。

掲句の「秋の海」は三秋に通用する季語であろう。「黙って陸を押してをり」が事実、三秋を包含する様態であるからこそ成立するのであり、そう構成した作者の力業が凄いのである。

手袋を脱ぎ鉄砲の手に重し　佐々木潤子

（『俳句界』11月号・甚平鮫より）

上五に「手袋を脱ぎ」とあるから、直に鉄砲に触れた質感を「重し」と表現しているのだろう。詩の世界でこその感性ということが出来るだろう。鉄の冷たさやゴツゴツとした触感は、言うまでもなく「鉄砲の手に」の箇所で表現されているのだが、「重し」は素手の感性なのである。重量が重いというばかりでなくて、存在感が重いのであろう。他に「大水槽に甚平鮫の腹仰ぐ」がある。

俳誌望見

梅澤佐江

『自鳴鐘』令和二年九月号　通巻八六四号
主宰　寺井谷子　発行所　福岡県北九州市

昭和二二年一月、横山白虹により九州で創刊。師系吉岡禪寺洞。「個性尊重、現代の情緒、俳句における詩性追求」を理念とする。（月刊）

主宰詠「明日葉」七句

明日葉茂る自粛に慣れし起き伏しに
高階に明日葉を掻き又自粛

コロナ禍、自粛を余儀無くされ蟄居のような日常にある中、高層マンションの明日葉は陽光を浴びて茂っている。今日掻いても明日には又葉が出てくる、その繁殖力と生命力に驚嘆する。

線状降水帯直下明日葉猛く在り
雨雲を刺す明日葉の花茎は

温暖化の影響で発生することが多くなり、大雨をもたらす線状降水帯に折も折入ってしまった。ベランダを見ると明日葉の蕾を持つ花茎は、雨雲を貫くかのように天に向かって奮い立っている。まるで見ている者を鼓舞するかのようだ。

明日葉の花もくもくと雨上がる
明日葉の不思議な花とwithコロナと
明日葉の剛き力ぞ花に充つ

雨も上がり明日葉の花が盛んに開き始めた。茎の先端の黄白色の小さな星々を散りばめたような「不思議な花」と、まるで壮大な社会実験のような解釈のつかない訝しさの「コロナとの共存」という取合せの妙。明日葉の剛い力が花に充ち溢れる様は、未曽有の困難を乗り切った先の、宛ら花言葉である「未来への希望」に繋ることを念じたい。

全句の中の明日葉を通して、日に日に状況の変化する現代の中で、時代の波に翻弄されることなく自分を信じて歩を進める凜とした姿勢を見た。

漣光集Ⅰ　主宰選　一名　七句より　目次翠静
父の日に届きしリボン凜とせり　青木栄子
漣光集Ⅱ　主宰選　一七名　各五句より　三名
ぐずぐずと人間でいる大夕焼　赤澤敬子
東京アラート都庁はサルビアより赤く　あべまさる
東京の首の回らぬ扇風機
自鳴鐘　主宰選　一一一名より　五名
自粛解除と書き以下余白男梅雨　与田雅彦
金魚鉢あふれ線状降水帯　寺本左記子
水害の畳は地球を重くする　古賀日彌子
立夏のマスク季語の力を失へり　瓜生惠美子
百足出るとつさに夫の靴で打つ　広瀬敦子
自鳴鐘（会員）　主宰選　五二名より　三名
グランドもコロナに支配され灼くる　中村重幸
母の出す薄きカルピス迎え盆　平野菜穂子
枇杷の種吐く告解をするやうに　小野智輔

その他、「寺井谷子を読む57、主宰筆の「コロナ時代の俳人達（コロナの春に）」、主宰選評「思いの海　言葉の海」、同人による会員指導欄「花時計」兼題（野分）等々、読み応えのある誌面である。

山本鬼之介　選

水明集

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し
秋霖や質屋の窓の嵌め殺し
岩撫づる波音も秋稚児ヶ淵
石段に染むる我が影秋彼岸
秋暁の蹠を恋ふる古畳

さいたま　曲淵徹雄

身に入むやカザルスの弾く鳥の歌
身に入むや手擦れし母のコンパクト
束の間の棚引く天衣秋夕焼
彩と香を愛でし一鉢菊膾
佳き日なりフィナーレ飾る秋夕焼

高崎　原田秀子

編笠や娘気取りの風の盆
糊効きしワイシャツの襟秋の朝
鰯干す海岸通りダビットソン
本尊の陰でとよもすちちろ虫
蟋蟀や秒針響くひとりの夜

さいたま　保坂翔太

秋天へ唸りをあぐるコンバイン
遥かなる黒き稜線秋夕焼
閉園の回転木馬秋夕焼
思ひ出と共に歌あり秋夕焼
風に香を里に野菊の盛りなり

熊谷　越田栄子

濡事はまかせておけと村芝居
山羊の乳搾る少女や草紅葉
秋祭妻の里より毬饅頭
秋暁の芋の味噌汁熱うせよ
辻に立つ戦捷の碑よ草紅葉

さいたま　染谷正信

秋暁の水の硬さを手に掬ふ
秋暁や川中島の古戦場
秋の朝富士が近くに来てをりぬ
幾度も労ふてより案山子抜く
田のことは案山子と妻に託しをり

上尾　横山君夫

唯一無二青き地球の秋の色
野仏の顔も和らぐ秋の声
過疎村に移動図書館秋の声
山里の火点し頃は秋の声
肌寒のはなれて二人レモンティー

さいたま　渋谷きいち

菊覚めて無音の寺を彩れり
亡き父母の影が座りて菊燃ゆる
身に沁む朝に齢数ふるこころの指
秋の夜に文を綴りて安堵せり
柿熟れて鼓動の止まぬ昼下り

熊谷　神田治江

晩秋の鐘山里の音となり
マネキンの着替へ迅速肌寒し
肌寒し気まづさ残る二人かな
潤む目やひとり芝居も秋の声
篁に射し込む光秋の声

川口　野田静香

雨冷や見沼田を行く傘二つ
限界の村にも鳥の渡りけり
秋茄子や母校の女優先立ちぬ
村の子のでんぐりがへし秋深む
秋の田や村に子宝親宝

さいたま　日高道を

秋うらら真鯉水面の雲を吸ふ
朝寒や太極拳の師の動き
そぞろ寒湯宿の灯点る頃
秋澄むや轟音残る三里塚
この道を選ばばきつと別の秋

さいたま　青木鶴城

林中にぽとんと音が秋の声
秋の声雲を追ひかけウォーキング
肌寒や床に素足が染み透る
肌寒や残り少なきカレンダー
待ち居れば雲の間に間に今日の月

塩野久子

秋の声悲喜こもごもの古戦場
渡り鳥一列のまま空に消ゆ
肌寒や熊に注意の掲示板
雲間よりつと現はるる十三夜
湯上りの肌の寒さに月明かり

新　暦文

弁慶の爪先までも菊飾る
秋晴や前垂れ乾く六地蔵
手入れせし庭正装の秋日和
三千院褥に欲しき枯紅葉
祝詞を神妙に聴く七五三

川村　治

豊作に舞ふ巫女の笑み神楽殿
静寂の秋楽しみ酒の増す夕べ
雁渡し消印薄き母の文
入り日追ふ海沿ひの町秋の色
甘藷掘や夕日がビルの背に落ちて

さいたま　梅澤輝翠

米櫃に今日新米の香りかな
新米や「おかわり」の声三ばい目
絶好の時は束の間秋寒し
花芙蓉ニンフ微笑むやうな朝
木犀の金の玉座となりにけり

西幅公子

離れ庵ぽつと華やぐ初紅葉
秋風やリハビリ道をみな無言
背丸く柿掩ぎくるる翁かな
秋蛍ほたりほたりと明滅す
初紅葉蔵書に一葉挿さみけり

加藤でん治

柿すだれさびしき村を煌々と
柿ひとつ鞄の底に沈めけり
朝寒の散歩落下物に注意
礼儀正しき野球少年水澄めり
曖昧な旅の約束水澄めり

東京　石川理恵

校庭に下校のチャイム秋夕焼
窓の辺の灯を消して今日の月
藁塚や鼻孔くすぐる陽の匂ひ
秋寒し客を呼び込む鳩の笛
秋寒や首定まらぬ風見鶏

さいたま　笹本啓子

菊の香や武蔵の国の野の羅漢
文に見る人の気品や菊日和
身に入むや危機の中なる子の瞳
身に入むや万もの銀河ある話
秋夕焼べんがら格子きは立たす

東京　鈴木和子

晩秋や覗けば深きお七井戸
松笠に話の替はる別れ際
九十九折下れば別れ紅葉山
巡礼の背に晩秋陽が宿る
菊横に梵妻きちと朱印押す

さいたま　橋本京子

棚田燃ゆ神に供ふる今年米
湯気を立て仏飯となる今年米
一碧の隠し事なき秋の空
秋空や炸裂音はエアバック
失恋を消しゴムで消す星月夜

竹澤和子

俳聖も愛でし大津絵秋の展
大津絵の鬼が目をむく良夜かな
ぷりぷりの刺身にそつと小菊添へ
羽毛鶏頭万の炎を青空へ
秋晴や表示ちからに又歩く

さいたま　斎藤みよ

迷ひ子のやうに小径の曼珠沙華
稲掛くる棚田染めゆく夕陽かな
秋燈や戦国の謎語り合ふ
秋の海波音まさにレクイエム
ゆつたりと曲がる旧道柿熟るる

平塚　丸屋詠子

降り足らぬ雨や残暑の畑に立つ
秋彼岸会ひたき人と会へぬ日々
秋の風豪雨の跡のまざまざと
「まむしに注意」の立て札芒原
枝豆の産毛をこする能登の塩

若狭　山﨑郁子

移りゆく花の晩秋母の庭
静けさや里の晩秋鍋の音
寺の菊仏の慈悲に満ちて咲く
晩秋や一枚羽織りペンを持つ
庭の菊手折りて父母の墓参り

さいたま　藤岡真知子

本堂へ続く回廊椿の実
秋の河鷺を配して点描画
小鳥来る餌をしのばせ池の辺に
秋簾そつと隠せる破れ障子
コスモスの街道ステップ踏み外す

伊予　向井章子

裏庭に山栗のある山の宿
山栗の屋根を転がる夜更けかな
朝食に主自慢の栗おこは
秋の山斜面林から色づきぬ
絵の才の無さ知る吾よ秋の山

杉戸　佐々木史女

秋高し実り豊かに我も肥ゆ
空へ露はなちて雀翔び立ちぬ
地がそつとため息つくや鰯雲
手弱女が裏に朱秘むる秋袷
声まねは百舌の嗜み百種ほど

吉川　杉浦理恵

老僧の法話かみしめ零余子飯
鮭帰る最後の仕事果さむと
栗おこは人の情けも味はひし
冷やかや顔を撫でゆく窓の風
爽涼や朝一番のティーショット

さいたま　反町　修

今年米気負ひも味も上上に
実り抱き青を深むる秋の空
地中より燃え立つごとく曼珠沙華
島田髷揺れて乱れて曼珠沙華
白式部枝垂れる程に空深し

さいたま　菅原真理

襤褸纏ひあめつち統ぶる案山子かな
世はなべてデジタル志向捨案山子
風渡るカムイの里の濃竜胆
段畑の案山子見守る手刈りかな
背のびして抜きんでてみる吾亦紅

春日部　諏訪サヨ子

初時雨赤帽確と六地蔵
妹を待つ窓明々と初しぐれ
初しぐれ抱く赤子に掛くる衣
初しぐれ母の家仄と靄の中
人恋ふるしみじみ恋ふる濃竜胆

さいたま　霜多光代

散る柳母子寄り添ふお堀端
秋日和腰折る母の影法師
別れ路や踊太鼓の音遠し
見上ぐれば椋鳥西へ朝帰り
椋鳥や集団飛行形変ふ

村杉清吉

晩秋の雑木林の風静か
晩秋や古井戸の蓋朽ちてをり
晩秋や川沿ひの道くねくねと
椋鳥や人に馴染めず吾が世界
成田から旅発つ別れ秋の暮

さいたま　千坂平通

すり鉢を押さふる手欲しとろろ汁
百歳の遺影ほほゑむ菊日和
秋夕焼背に受け急ぐ家路かな
八十路には八十路の暮らしとろろ汁
切り通し過ぐれば風の野菊かな

田中泰子

朝寒や目覚ましの音小さくす
黒塗りの一椀父にとろろ汁
雨の中一列に咲く曼珠沙華
鈴なりの柿の色づく里歩き
参道の蟋蟀の声にぎやかし

木村るみ子

牧水の歌碑をなぞりて山粧ふ
車窓より粧ひし山の万華鏡
山粧ふ肌に纏はる有馬の湯
見沼田に藁塚小さき影をおく
道草は藁塚の影伸びるまで

森　和子

落人の里はしづまり菊日和
村呑みしカルデラの湖月映す
この歳になればわかるよそぞろ寒
秋日和空の真青に海もまた
白菊を活けて迎ふる旧き友

さいたま　臼田みち

冷まじや柩に喝を紫衣の僧
葉裏にも命を宿す青蜜柑
二つ三つ越境したる青蜜柑
伝言板に先に行くぞと曼珠沙華
仏具屋の仏頂面よ神無月

飯田忠男

薄紅葉山ほろ酔ひの好好爺
もう誰も登らぬ火の見鰯雲
諍ひて夫と無口に秋刀魚食ふ
秋灯下夫と吾とのディスタンス
秋の夜はカンパネルラに会ひにゆく

本橋稀香

秋夕焼染めし水面を出港船
秋夕焼海原染めて吾も染め
小春日や平凡な日が有難き
はぜ紅葉空家の庭が華やかに
烏八羽ならんで西へ秋夕焼

湯浅　和

鷹渡る海しか知らぬ漁夫の上
涙の量仏にあづけ震災忌
秋の風魚と会話す竿の先
頬ぶくろふくらむ婆の走り蕎麦
点心の秘伝のつゆや走り蕎麦

小浜　松島寛久

俊足の友を目で追ふ青蜜柑
母の待つ家路に蕎麦の白い花
訪ね来し秋の陸奥紫根染
里山に小町伝説花薄
名残茄子小さき畑の主となり

越谷　阿部幸代

不器用な来し方思ふ敬老日
庭草のどこからとなく虫の声
しよんぼりと客をみてゐる痩せ秋刀魚
秋暑し夫の背中の丸くなり
石仏の胸も豊かや小鳥来る

さいたま　水野興二

来し方をぽつりぽつりと秋扇
薄墨の文したためて二日月
唐臼のぎいーごつとん秋うらら
数珠玉の手玉さくさく母の音
秋うらら波静かなる診療所

川崎　鈴木玲子

秋暮るるささくれの指親ゆづり
綾取りの川のくづれや暮の秋
やじろべゑかすかな動き秋暮るる
絨毯のやさしき故郷パキスタン
今宵またひとりもよろし月見酒

さいたま　髙橋敏子

腕上げし二代目庭師初紅葉
太極拳揃ひ黙して秋惜しむ
越の旅舌が忘れぬ菊膾
負け癖の付きたるゲーム秋の暮
口覆ふ布にファッション秋うらら

いすみ　平石睦子

井戸水に温み覚ゆる秋彼岸
消え去る泡も流るる泡も秋の川
秋高しロマン遥けき石舞台
籾を焼く煙こそ明日香ひと筋に
新米を炊ぐ土鍋や独りの夜

さいたま　池田珪子

夕日受く古刹の屋根の散紅葉
露けしや避けて通れぬ細き溝
街路園一穂盛りの水引草
雁来るローカル線に添ひながら
雁が音のかさなり聴く夜父母の夢

若　狭　岡本祥子

意味深なことばさらりと梨の水
落栗を数へつつゆく散歩かな
いささかにかたき団子や居待月
芝居小屋出ればまばゆき秋の空
秋鯖や生姜醤油に塗りの箸

若　狭　檜鼻ことは

継ぐ人の絶えし名跡秋の暮
秋夕焼物干し台の赤きシャツ
稜線に連なる棚田秋夕焼
泣き止まぬ隣家の赤子夜寒し
提灯の「呑」が客呼ぶ秋の夕

さいたま　鈴木藻好

晩秋の森はさながら万華鏡
晩秋やふつくら煮物香る時
カザルスのチェロの音深き秋の夜
幾年や小菊咲く道通ふ道
晩秋やあれこれ締めの時に入る

山岸久美子

住職の下世話なはなし秋彼岸
コロナ禍に二の足踏むや秋彼岸
ホームから影絵の世界秋夕焼
「またあした」子らは家路に秋夕焼
エルメスのバッグを肩に敬老日

武田重子

修業僧に秋気昂まる永平寺
星月夜新空港に降りたてり
水面ける塩辛とんぼ朝の堀
群とんぼ全八ヶ岳一望す
一日万歩靴消耗や秋高し

さいたま　森下美智枝

グライダーは男のロマン秋の空
大気圏までとどけと背伸び秋の天
木枯や消火訓練積み重ね
秋寒に迷ふ衣服の厚みます
秋寒や一度下がりてメニュー替ふ

小川洋子

悄気てゐる我の先々秋夕焼
待ちぼうけ秋夕焼の駆け去りぬ
秋夕焼の余韻残して犬散歩
一斉に外燈点きて椋鳥の宿
秋夕焼持ち重りたるエコバック

緒方みき子

寒露かな大鷺川に立ちつくす
亀探す草かき分けて今日の月
つるべ落し夫の帰りを待ちわぶる
秋の夕釣りし魚で酒交はす
秋の日や昔話に花が咲き

和歌山　南條きわゑ

秋祭明日は南へ露店商
奥入瀬や紅葉散り敷く川の底
柿たわわ山の辺の道艶めきて
秋の鮎下り急ぎぬ宿場町
参道の乾く足音銀杏散る

草加　外村紀子

一歩づつ押されて前へ初詣
着ぶくれて氏神拝す願ひごと
流氷の軋みに父の声がする
初冬に負けず路傍の小花咲く
疾風や落葉と子等と犬が駈け

さいたま　篠﨑紀子

念入りにストレッチング朝寒し
七輪に拘る父や秋刀魚焼く
にこにこと妻似の女将おでん酒
活草や出だしを止め飛び六方
月光や彼の流刑地の能舞台

岡田宣子

柿赤し辺り一際夕日映ゆ
野川澄み水草の色増しにけり
水澄めり魚群回遊悠悠と
孤立よし群れて又よし曼珠沙華
新米のうれしき厨夕支度

東京　柳父はる

来る人の無き別荘や秋の暮
別品の意味取り違へ酔芙蓉
新米を外つ国で食ふ至福かな
内祝稚の重さの今年米
赤き血に戴きますと鰯裂く

さいたま　山戸美子

意識してしみじみと見る秋夕焼
秋草や添へられてゐる風神図
二十歳の日味諮れずの新酒かな
団栗や陸橋ころげソファミレド
夏の暮いつまで燃える赤き星

さいたま　綿貫ひさの

藁塚や日々の暮しに感謝のみ
体験の田にも藁塚もどきかな
山粧ふドローン映えして心浮く
山粧ふ富士に向ひて「アエイオウ」
移住一年粧ふ山を目の辺り

長井喜代子

小津映画のセピア鎌倉薄紅葉
古き本読むも終活秋深む
山の端の残照蕎麦の花淡く
蕎麦の花地産地消と村市場
雨止みて白樺林星月夜

宮代　関谷多美子

キッチンの椅子に愁思の我ゐたり
西空の赤く染まりぬ秋思ふと
句づくりの進まぬ夜や西鶴忌
川底のくつきりと見え水澄めり
紅葉や心はすでにふるさとへ

高原和子

新走り一荷に届く蛇の目猪口
山よりも川の名うまし新走り
柿を誉め柿の蘊蓄聞く破目に
廃村のその家家の柿撓
廃屋の柿の木雀の鈴生りに

東京　水落守伊

唐辛子白く輝く武甲山
朝市の賑はふ隅に唐辛子
発火点は畑の真ん中唐辛子
一呼吸遅れ子の声ばつたんこ
良寛の里で唄ふやばつたんこ

松田朋子

秋の蚊のまつはるままに友に文
兄がつと立つては消ゆる曼珠沙華
放す手のつなぐ喜び曼殊沙華
雲流る濁れる縁にカンナの緋
野良猫につられ裏口秋の風

大阪　飯塚智恵子

木犀の香りとともに子の来たる
お茶の花けもの道めく犬の道
水引草神の御技や花二ミリ
満月や電話の人と見上げたり
通草の実割れ待ちたる良き知らせ

鬼石　榊原聰子

街の灯のＬＥＤの夜寒かな
真南に太陽あれどやや寒し
朝寒や小用後の武者震ひ
朝寒やジャムたつぷりのパンケーキ
そぞろ寒喪中はがきがぽつぽつと

町田　瀬戸雄二郎

木犀の香におぼれつつ雨戸繰る
人去りて空地のままや草の花
草じらみつけて小犬の跳ね止まず
秋日和歩行訓練百歩まで
栗ごはんお隣り同志良き仲間

蕨　細井良子

後の月暗き露台へ手を引かれ
山晴れて軽トラで来る稲刈り機
一書置くや彼方に稲棒整列す
猪垣の電流犬は二度触れず
萩刈りの遅るる家を空けてをり

横浜　山岸弘子

吉野川見下す地蔵秋の空
秋の空追ひ込み漁の島男
仏壇を息子と選ぶ秋の暮
その赤が人引きよする曼珠沙華
西陣に伝はる機や暮の秋

さいたま　野村美子

秋霖や三密自粛にテレワーク
コロナ禍や列島焦がす曼珠沙華
秋霖にアルバム整理過去詰まる
散策に誘ふ空や秋さびし
山荘を染めたる萩を括り帰す

東京　河原叔子

夫の二度目の停年を山粧ふ
クスクスと藁塚の中笑ひ声
コロナウイルス収束せずも山粧ふ
藁塚の力みなぎる青さかな
爆発だゴーツートラベル山粧ふ

さいたま　田中タイ

卒寿での旅立ち白き彼岸花
お月見や遺影を向けて仰ぎけり
鯛飯は新米婆の誕生日
誕生日孫より貰ふマロンパイ
煮浸しの色良し味よし名残り茄子

藤沢　小島喜代子

老犬にお辞儀してゐる狗尾草
爺と婆手つなぎ散歩秋うらら
秋うれひ独りよがりの昼の酒
母にかけよか数珠玉の首飾り
線路脇ひよいと顔出す彼岸花

東京　畑宮栄子

秋うららお願いしますテラス席
秋うららロイヤルブルーのセーターで
ピアスにせむ翡翠色なる葡萄の実
青てふは露草の青水絵具
陽に闇にただ赤を吐く曼珠沙華

山中いちい

菊褒めて初めて口利く隣の主
湯上りの嫁と姑の新走り
茶も飲まず菓子持て帰る日短
珈琲カップ持ちて見てゐる望の月
日照雨降るコスモスの道会ひに行く

横浜　川島典虎

神饌にピンと尾の立つ鯖一尾
左見右見して感嘆や百合大輪
音もなく落す切符や冬来る
誰待つとなく椅子二つ秋の夜
雁渡し月夜の蝶とすれ違ふ

さいたま　伊藤愛子

レトロ車の終着駅は銀河かな
礼状にお礼の葉書ななかまど
秋の波橋机岩の神話かな
ちらちらと小舟の明り秋の海
秋うらら初体験の車椅子

和歌山　髙橋満耶子

二才児の歓声黄落をまとふ
樹を抜くる風さわさわと水澄めり
水澄めり朝の挨拶やんはりと
ゆるやかに岩をまはりて水澄めり
銀杏黄落座る私と走る彼

さいたま　山下ユリ子

晩秋や手脚伸ばして湯宿かな
読書終へほつと一息菊香る
立ち枯れて楚々と又咲く小菊かな
坂の上菊一輪が咲き誇る

遠西勢津子

大輪の菊花作者の思ひこめ
懸崖の菊流れの如く咲き揃ふ
晩秋の道足早に暮れゆけり
晩秋の雲荒川を流れゆく

川口　田村福美

朝寒し猫のゐどころ探す母
秋の夜秘密解きつつ観る「魔笛」
月の頃君と歩きて次の道
黒葡萄黒曜石の故郷より

さいたま　小駒さち子

再開の対面授業小鳥来る
駆け抜くる真の顔や体育祭
学び舎のマリアに秋日寺の町
幾度のターン試歩の途つゑの秋

大阪　遠藤人美

椋鳥の厚かましさに一樹貸す
白浜を群青色に秋夕焼
椋鳥の群れ去り静か老舗宿
還暦を祝ふ窓辺や秋夕焼

東京　飯室夏江

一匙にかをりをすくふ薺粥
前掛と俎板ほしぬ女正月
しほさゐのはるかに富士の雪化粧
むさしののこもれびつたひ落葉ふむ

所沢　関根千恵

マネキンにスカーフ巻いて寒露かな
新月や習ひ始めの三味の音
満月と語らひ今日の一万歩
太平洋を飲み込むほどの秋夕日

和歌山　嶋田洋子

生い立ちを嘆いて成るか天の川
清書すや墨の滲みへ小鳥来る
年寄りは時代錯誤や流れ星
昔祖母取り上げ婆や冬籠

小川　藤間友二

さまざまな神を宿して山粧ふ
青年はレディに声を山粧ふ
藁塚に人影はなし鳥三羽
藁塚が少年達の基地となる

さいたま　落合和枝

君と僕川面も燃ゆる彼岸花
十六夜や星も従ひ兀兀と
次郎柿扁平なれどいと旨し
国昌寺見沼の大地柿日和

福田育子

山開き安全願ふ冬桜
十代の恋の思ひ出コスモス野
つるのびて甘き香りのあけびかな
自転車の通学生や秋の声

鬼石　加藤ナヲ子

朝寒や郵便受けに鳥のふん
朝寒や母のベストを羽織るなり
お供への食べ頃は栗十三個

さいたま　樋口元美

令和３年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格	季音同人を除く同人・誌友
応 募 句	未発表作品：15 句(表題を付す) 水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
締　　切	令和３年２月末日（発行所必着）
応募方法	水明 12 月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（９名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　井口俊晴
保坂翔太　青木鶴城　日髙道を

新珠賞推選委員（５名）

宇田白鷺　大橋廸代　茂木和子
椎野美代子　波多野寿子

青い空亡妻の笑顔におけさ柿
故郷のリンゴ久しく丸かじり
蟋蟀の合唱楽し散歩道

春日部　増田静司

道端に楚々と咲きたる草の花
草の花テーブル脇に飾りけり
公園で幼子両手に草の花

さいたま　工藤信子

作品評

山本鬼之介

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し　曲淵徹雄

卒塔婆に対する一般的な印象は、「冥さ」と「果無さ」であろうか。しかしながら、この句の卒塔婆は実に明るく闊達な様子を見せている。秋季における絶好の日和を示す季語の斡旋によって、他に類を見ない卒塔婆の様子が描かれている。やや強めの風に揺すられて、文字の薄れた古い卒塔婆と、木肌の新しい卒塔婆か一緒になってかたかたと音を立てている様子を、「カラカラ笑ふ」と擬人的に表現したところが秀逸である。

彩と香を愛でし一鉢菊膾　原田秀子

山形県では、菊膾に使う菊を「もってのほか」と言う。言葉の意味は、「天皇の紋章である菊を食べるとは、以ての外である」とか、「思ったよりも美味である」ということらしい。筆者も、山形県の庄内で工場実習をしていた頃、この言葉を初めて聞いてとても奇異に感じた。食用菊で一般的なのは、黄菊の「阿房宮」と紫がかったピンク色の「化白」だそうで、「もってのほか」は化白で作ったものを指すそうだ。彩りと香りと味を最高に引き出すレシピによって料理された菊膾が膳を飾り、好事家の目と口を楽しませる。

本尊の陰でとよもすちちろ虫　保坂翔太

本尊は、信仰と祈祷の対象として、寺院本堂の中央に安置される仏陀や菩薩の意となっているが、大寺や古刹は無論のこと、どんな小さな寺でもご本尊は大切に扱われており、数十年ごとに一般公開するような秘仏もある。さて、この本尊はどのような寺に祀られているものか興味が湧く。本尊が安置されている場所までずかずか入り込んで淋しげな声を鳴り響かせている蟋蟀に、ご本尊はどんな感情を抱いているのだろうか。

閉園の回転木馬秋夕焼　越田栄子

この場所が遊園地であることは間違いないと思うが、やっかいなのが「閉園」の二文字である。何かの事情で営業を止めた遊園地なのか、その日の営業時間が終って門を閉じたのか、解釈が分かれるからである。その日の営業が終って、秋

の夕焼けに染まって明日への英気を蓄えている回転木馬も味があるが、永年働いた職場が閉じられ、働き場を失って朽ちゆくままに無為の日々を過ごしている回転木馬も泣かせる。夏の夕焼けでなく、秋の夕焼けに解釈を委ねるならば、後者が妥当と思う。

辻に立つ戦捷の碑よ草紅葉　　染谷正信

日清戦争や日露戦争に関わる戦捷記念碑かと思う。その当時多くの記念碑が建てられたと思うが、その後の時代の変遷と共にほとんどが姿を消し、残っているのはごく少ないと思う。「辻に立つ」から察して、地方都市に遺されている小体な碑のように感じる。今ではその碑に関心を寄せる人も無く、碑の周りを四季の草が囲んでいる。草紅葉が、戦捷碑の存在感を確かにしている。

秋暁の水の硬さを手に掬ふ　　横山君夫

水を手にした時の感触には、四季それぞれに違ったものがある。掲句の季節は秋、それも明け方であるから、真冬のような冷たさは無いにしても、それなりの抵抗感があったのだろう。その感覚を「水の硬さ」と捉えたところに、作者の非凡な感性を認めた。

肌寒のはなれて二人レモンティー　　渋谷きいち

少し寒さを感じる晩秋の朝。朝食後のティータイムの夫婦の姿を思い描いてみた。「はなれて」という言葉に、それぞれが自分の時間を慎ましく大切に過ごしている様子が窺える。爽やかで洒落た俳句である。

菊覚めて無音の寺を彩れり　　神田治江

住職が手塩に掛けている鉢植えの菊であろう。朝まだきで寺の住人も起きておらず、むろん勤行も始まっていない。まさに無音の寺である。『皆起きろー』と号令しているように、菊がひときわ輝いている。

篁に射し込む光秋の声　　野田静香

竹林・竹藪の意である篁（たかむら）は、響きが佳く高貴な感じを与える言葉である。竹の葉の隙間を縫って日光が射し込み、幾条もの光が幽玄の世界を作り出している。日本昔話の「舌切雀」、また、「竹取物語」などにも通じる篁であることから、季語の「秋の声」が結びついたのかと思う。

雨冷や見沼田を行く傘二つ　　日高道を

本句の季語は、秋になって肌に直接感じる冷気を表す「冷やか」の傍題であり、余計に冷たさが伝わってくる。見沼田圃の自然の中に溶け込んで行く二つの傘。傘を差しているのを男女と見たが、二人の年齢や関係など、細部に想像を働かせると、傘の二人を軸にした景色がさらに立体化する。

この道を選ばばきつと別の秋　青木鶴城

二股道か三叉路かの別れ道の選択なのか、それとも、複数の方法の選択なのか、なかなか複雑な俳句である。俳句の具象性を重んじる筆者としては、前者として考えたい。もしもこの道を選んだならば、きっと今来た道とは違った景色に出会えるのではないか。という句意になろうが、どうも迫力がない。やはり、後者即ち「己の人生をかけた勝負の道」を根底に置いた俳句であろうと推察した。

林中にぽとんと音が秋の声　塩野久子

穏やかな秋の陽射しを浴びて公園を散策していたら、林の中から「ぽとん」という音が聞こえてきた。という句意に受け取れるが、その音が何であるかは読み手に任されている。林の中にある小池に居る魚が跳ねた音か、それとも別の音か。作者の俳句には、独特の「間」と「余韻」があり、この句もその一つである。

秋の声悲喜こもごもの古戦場　新暦文

川中島や関ヶ原のような大規模な古戦場の他に、日本各地に、大・中・小さまざまな古戦場がある。それぞれの戦場で、それぞれの事情によって戦が行われ、多くの死傷者が出た事であろう。勝鬨を挙げる勝者の声と、呻きつつ敗走する敗者の声。古戦場に立って瞑目していると、秋風が立てる音が、かつての軍人（いくさびと）の声に聞こえてくる。

手入れせし庭正装の秋日和　川村治

夏の間伸び放題になった庭木を刈り込んでさっぱりと一変した庭景色。まるで普段着から余所行きに着替えたような見映えのする庭になった。「庭正装」は言い得て妙で、綺麗になった庭に様子と作者の心の内を巧みに表現している。

豊作に舞ふ巫女の笑み神楽殿　梅澤輝翠

その年の米の豊作を祝う祭事の一齣であろう。鎮守社の神楽殿で、正装した巫女が、鈴と榊を持って舞っている。切れ長の瞳が美しく、微かな微笑みが見物人の心を奪う。と、筆者は巧みにその場を再現してみた。

花芙蓉ニンフ微笑むやうな朝　西幅公子

朝の散歩道で、見事に咲いた芙蓉の花に出会った。まるで、開いた花の中から、小指ほどの小さな花の妖精が次々に飛び出してくるような思いであった。きっと素晴らしい一日が訪れたことであろう。

離れ庵ぽつと華やぐ初紅葉　　加藤でん治

「離れ庵」を広辞苑で引くと、「人里を離れた所にある庵」という解説がなされている。それを手がかりに掲句をひもとくと、瀟洒な生垣を配した小体な庭と飛び石、その奥にある苫葺きの庵が目に浮かんでくる。第一線を退いて野趣に富んだ余生を愉しんでいる文人の住まいである。質素な佇まいが、やっと訪れた初紅葉によって華やいだ。

柿すだれさびしき村を煌々と　　石川理恵

年々住人が減っている山村を想像する。家ごとに、収穫した柿を剥いて軒いっぱいに吊している。まるで万灯会の灯のように、貧村を華やかに飾っている。しかし、まもなく淋しい冬がやってくる。

窓の辺の灯を消して今日の月　　笹本啓子

中秋の名月の日、願いが叶って夜空が晴れ、いよいよお月様の出番の時を迎えた。家中の電燈を消し、窓辺のスタンドも消し、原始時代に還ったように、月光を思うさま浴びた。

文に見る人の気品や菊日和　　鈴木和子

字の上手下手は、持って生まれた才能が大きく影響すると思うが、書道やペン習字を学習することで、後天的な効果が得られると思う。貰った手紙の文字と文面から相手の気品までも見通すことはなかなかのものである。字に現れる気品は、書いた人の心の豊かさを表すものではないかと思う。菊日和が、双方の心の通い合いを証明している。

失恋を消しゴムで消す星月夜　　竹澤和子

失恋は、女にとっても男にとっても、後々の人生に甘くまた苦い思い出となって残るものかと思うが、その元となるものを消しゴムで消してしまうという発想が面白い。実際は、夜空に広がる星を眺めて心の憂さを拭い去ろうとしているのだが、果して結果は。

ゆつたりと曲がる旧道柿熟るる　　丸屋詠子

直線的な国道を縫うように、旧街道が昔の面影を遺している。草鞋履きの旅人気分になってのんびり歩いてゆくと、道の両側の家々の柿が見事に盛りを迎えていた。

水琴窟

（水明集十一月号鑑賞）

池田雅夫

びしよ濡れのどろんこ遊び夏来る　小島喜代子

ひと昔前の話であろうか。広場や公園のぬかるみなどで、泥のだんごを作ったりして、衣服の汚れなど気にせず遊んだものだ。現代はそんなことをしたら頭ごなしに叱られることだろう。「夏来る」の季語が適切に情景を現わしている。

七ツ星自慢の家紋天道虫　福田育子

いきなり「七ツ星」と置き「自慢の家紋」と続ける。はて、何のこと、と思っていると「天道虫」と締める。ああ、七星天道虫かと納得する。その意外性がいい。七つ星を「家紋」と見たてた独想性を称賛する。「七ツ星」で円滑になる。

短夜や看護士を呼ぶベルの音　武田重子

「短夜」は「明易し」とも言われ、夏の夜の短かい感じをいう。病院でのことであろう。二度三度と鳴るベルに対応していると、あっという間に夜が明ける。看護士には休むひまがない。「短夜や」の詠嘆に感謝の念が込められている。

見得を切る派手な隈取り夏芝居　湯浅　和

「夏芝居」は夏季に興業するいろいろな演劇を言い、歌舞伎に限らない。「隈取り」は歌舞伎俳優が人物の性格・表情を誇張するためのもの。その迫力に圧倒されそうだ。

戸を繰れば慌てふためく守宮の子　関谷多美子

雨戸を開けて一日が始まり、そして閉めてひと日を終える。平凡な中にも充実した暮らしがある。日常の景色の変化を敏感に察知し、小動物への慈しみが深くなるのも当然である。「やもり」とは家を守るという意味だそうである。

くちなしの辺り説き伏す香りかな　岡本祥子

初夏の頃に白い花を咲かせ、辺りに甘く濃厚な香りを漂わす梔子。その強い香りを「辺り説き伏す」と捉えたことに感心した。香りを修飾するのにこの上ない賛辞と思う。往来する人をはじめ、「辺り」を想像するだけで楽しくなる。

北岳の山小屋の朝霧動く　木村るみ子

南アルプスにある「北岳」は標高３１９３ｍで、富士山に次ぐ高さを誇る。夏山から秋の山へと季節が移る頃、秋雨前線の影響もあって霧が発生しやすい。「霧動く」の措辞は霧の早い動きと、対照的にどっかと動かぬ北岳を強調している。

赤とんぼ明日の天気を告ぐる雲　篠﨑紀子

夕暮れに群飛ぶ赤とんぼ。空を埋め尽すかに高くにまで飛んで夕焼け空と一体になっている。夕焼けは明日の晴れを、朝焼けはその日の雨を暗示しているという。その光景を目の当たりにして、きっと童謡を口遊んでいるにちがいない。

ぽつねんと美瑛の丘の夏木かな　諏訪サヨ子

北海道美瑛の丘は有名な観光スポットである。丘一面の花畑の中に一本だけ立つ木がある。「クリスマスツリーの木」とも呼ばれるエゾマツの類である。広大な丘に色とりどりの花が咲き誇る中に一本だけ立つ夏木が空の青さに映える。

コロナ禍に檀家廻れぬ盆の僧　髙橋満耶子

コロナ禍で外出を控えたり、人の集まりを中止したり自粛生活の延長を余儀なくされた夏であった。僧侶であっても盆の檀家廻りができない。葬儀・法事においてもままならない状態である。「に」の助詞を「や」として詠嘆の効果を。

大の字の男はみだす砂日傘　嶋田洋子

「砂日傘」はビーチパラソルのこと。海水浴場などで使われる大日傘である。大の字になって転た寝をしているうちに、次第に日が回ってしまい、はみだしてしまったのだろう。

秋の野や時に横切る甘き風　緒方みき子

「甘き風」が想像をかきたてる。野に咲く花の香りであろうか。それとも日に照らされた草の匂いであろうか。定年後の二人連れであるならば「甘き風」は青春の想い出かも知れない。はたまた、壮年期の熱い滾りを詠んでいるのかも。

狼煙場のある城跡や遠郭公　藤間友二

「狼煙」は遠方に知らせる合図や警報である。戦国時代は尾根から尾根へと伝達されたのであろう。山城の跡には、その狼煙場の痕跡が残っている。見晴らしの良い高台であろうか。折りしも遠くで郭公が鳴いている。風が心地よい。

何処へと天道虫を眼で追ひぬ　伊藤保子

「天道虫」は細い枝や葉先に登りつめると、さっと飛んでいってしまう。その生態をじっくり観察している。可愛らしさに、つい手を出して触れたくなる。興味深く見ていると羽を出し飛び立ってしまった。あらら、何処へと眼で追った。

刺されても殺生はせず夏の終り　樋口元美

蚊の煩わしさに悩まされた夏も終るころ、やがて死んでしまうであろう蚊に情けをかけているのだ。柴原保佳は「打ち損じたる秋の蚊は追はずとも」と詠んでいる。

大村節代　選

鼓笛集

札所へとどんぐり跳ぬる磴を踏む　越田栄子

並びゐる千の石仏紅葉降る
黄落の光の中に君の影

新宿は眠らぬ街よ顎マスク　渋谷きいち

木枯のゴールデン街吹返し
新宿の母を探して冬の月

吾の身丈超ゆる板碑や銀杏散る　斎藤みよ

連山を確と縁どり冬夕焼
紅葉散る考丹精の生垣へ

児は素振り百回といふ冬休み　加藤でん治

枯園をナースと歩む日和かな
旧友と別れて仰ぐ鰯雲

大寺の幡のカラフル神の留守　笹本啓子

木の葉舞ふ子等は両手を広げつつ
ここよりは落葉踏みしめ獣道

花八手生涯母は夜会巻　梅澤輝翠

山茶花の垣根ぐるりと珈琲店
境内の猫友は逝き石蕗の花

箱住ひ冬は豪奢な朝日付　杉浦理恵

わが心知るや冬天あつかんべー
母冬天で乳を流すや水縹

残り柿樹林に深く息吹くなり　神田治江

小春風樹々の語らひ作り出す
背冷ゆる重い足音聞くときに

冬の田へＧＯＴＯイート群雀　葛城千世子

指揮者ゐるや五十羽群るる冬雀
電線に等間隔の冬雀

朝に夕に海を見てゐる石蕗の花
栗がころころ柿がころころ宅急便
故郷の封書開けば紅葉舞ふ

川島典虎

鑁阿寺や銀杏の五百五十年
街路樹の裾山茶花の花あかり
柊の花の香うれし曲り角

佐々木典子

パソコンを使ひこなせず暮の秋
便り待つやうにリコリス咲くを待つ
長堤を足どりはづみ小六月

榊原聰子

十薬に陣を取られて雨上がる
皇帝ダリア小春の空を舞ひ踊る
深谷のレンガ街を飾りて山眠る

菅原真理

帰省子の土産抱へて凱旋す
老いてなほ余熱ふつふつななかまど
夜神楽や太古の夢継ぐ男衆

佐藤克之

街灯の自動点火に秋きざす
屋々ごとに山荘水抜き山眠る
落葉散るアート風紋の松山路

河原叔子

山茶花や散りても赤を鮮やかに
友も観しスマホで語る十三夜
山を撮り次に落葉をカメラマン

塩野久子

白芙蓉白寿手前の義母見舞ふ
腹いつぱい空をむさぼる秋の朝
捨案山子への角取れてハの字かな

安倍弘夫

鼓笛集巻頭（十二月号）

私の好きな一句（自句自解）　森　和子

母の忌に小春賜はり三姉妹

母の命日には、都合を合わせ三姉妹でお墓参りに行く。

女三人寄れば、御多分に洩れず、花を買うにも、墓前でも賑やかだ。そしてすぐ昔に戻り懐かしさが甦る。

近頃は墓参りは口実の感はあるけれど、お互い七十歳を過ぎて元気に会えることは幸せなこと。そして小春なら尚のこと。

鼓笛集作品評

大村節代

並びゐる千の石仏紅葉降る　越田栄子

札所とは巡拝者が参詣のしるしとして、札を納める寺堂である。作者の詠まれたのは、秩父札所三十四ヶ所、第三番真福寺であろうか。ここは山道に沿って石仏が並び、観音堂への一歩一歩にありがたさがつのる。降る紅葉が深みを増す。

新宿は眠らぬ街よ顎マスク　渋谷きいち

多数の人が行き交う新宿、けれど誰も他人の事は気にしない。コロナ下でも、新宿はやはり伏魔殿なのであろうか。

「新宿ははるかなる墓碑鳥渡る　福永耕二」

長い間、右の句に共感していたが、掲句は、コロナ時代でも活動を止められない新宿、いや人間を詠んだのかと思うのだが……。

吾の身丈超ゆる板碑や銀杏散る　斎藤みよ

板碑は「板石塔婆」か「青石塔婆」が正式名称といわれるが、薄平な石の板であることから板碑と呼ばれたともいう。何れにしても仏教の卒塔婆である。その板碑に手を合せ、天を見上げると、寺の歴史ある巨木から銀杏黄葉が舞う。景をより深くし、ふと神の存在を思う。

二句目の「紅葉散る考丹精の生垣へ」の考（こう）は亡父の事で良くこの漢字を用いたと思う。亡父をルビでちちと読ませないで考を用いる。但し亡父（ぼうふ）亡き父と用いるのは良い。ちなみに亡母は妣（ひ）。

＝水明掲示板＝

◆さいたま市浦和俳句連盟秋季文化祭俳句大会

兼題の部

さいたま市議会議長賞（2位）荒井倶子　12位　田中泰子
13位　丸山マスミ　16位　星野和葉　28位　綿貫ひさの
29位　高島寛治

席題の部

埼玉県知事賞（1位）熊倉千重子
埼玉新聞社賞（3位）五明　昇
9位　星野和葉　14位　高島寛治　16位　綿貫ひさの
30位　本橋稀香

句集喝采

近藤　徹平

◆原嶋光代「生絹」

東京四季出版

著者略歴　昭和十八年東京都世田谷区生。平成十一年「草の花」入会、藤田あけ烏に師事、同二十二年「雲取」入会、鈴木太郎に師事。俳人協会会員。

鈴木太郎「雲取」主宰は、帯文に著者は「祖父の手解きを受け、家業の呉服の仕事をしてきた（略）誰の手も触れていない「生絹（すずし）」を句集の標題として贈ると記している。

潮入の水の眩しき恵方道
満身に大地海の気青岬
一人には余る波音今日の月
気が付けば桜の下にゐて二人
夜の秋欅と同じ呼吸して

著者は生れも育ちも東京都世田谷区だが、自然の景を活写した句が多い。第一句と第二句は大地と海の大きな景。第三句は一人旅の宿か、水辺で聞く波音を恐らくは最愛の夫と分かち合いたいと願う句。第四句は夫と桜を二人だけで愉しむ句。第五句は武蔵野の欅に同化して愉しんでいる句である。

呼ぶ声に声出ぬ無念夏の霧
生き死には神の領域鰻食ぶ
逆光の富士（ふじ）山見し一陽来復ぞ

令和元年に手術麻酔のショックで生命の危機に見舞われたが、俳句とともに復活して今や意気軒昂。次の句集を期待。

◆藤井康太郎「一本欅」

東京四季出版

著者略歴　昭和三十年栃木県那須町生。昭和六十二年小出秋光元主宰「好日」入会、平成十六年「白雲集」同人、同三十年白雲賞受賞、俳人協会会員。

長峰竹芳「好日」名誉主宰は帯文に「康太郎俳句の原点は那須野の自然に育まれた郷土愛・家族愛」と記す。深田久弥は『日本百名山』に「関東から奥羽を縦断して北海道・樺太へ走る火山脈に那須の名が冠」されると那須の来歴を記す。

那須岳の神隠すごと細雪
雲巌寺芭蕉の句碑や囀れる
目印の一本欅山笑ふ

著者は那須町に生れ育った。第一句は自宅から見る冬の那須岳。第二句は芭蕉が奥の細道で那須に立寄り残した「啄木も庵はやぶらず夏木立　芭蕉」に因む。第三句は自宅の近くの廃校に残る著者が馴れ親しんだ欅の句で、句集の標題句。

幼子の声を奏でる虎落笛
平成と活字を拾ふ寒の朝
シャガールを話題としたる休暇明け
除夜の鐘世紀を跨ぎ仕事する

著者は自らの出身校で教師として定年まで勤めあげた。俳句活動には距離と勤務時間の制約があり殆ど独学であったが、中断の危機を乗り越え今日を迎えた。その執念に拍手喝采。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境　延昭　報

山間の稽田縫うて郵便夫　マスミ
稽田に山の翳りの早まりぬ　由紀子
分かち合ふ互ひの痛みとろろ汁　和　葉
稽田に米一俵の話など　延　昭
陣痛を一緒に堪ふる神の留守　節　代
稽田に神の刷きたるはぐれ雲　〃

――以上特選

傷秋や頭痛騙りし子はふて寝　理　恵
木の葉髪痛みを語り別れけり　チアキ
稽田や鴉が帰る空真つ赤　治　子
続けざま頭痛歯痛に冬の朝　愛　子
子を打ちし胸の痛みや赤蜻蛉　大場順子
木枯しやいよいよ来るか偏頭痛　節　代
月山より鷺一羽下り稽田に　光　弥
痛痒き膝の瘡蓋運動会　喜　恵
トンネルを抜け稽田の青まぶし　はるみ
秋黴雨酒豪に効かぬ痛み止め　延　昭
痛恨のバトンリレーや秋の末　徹　平
遥かに富士を望み稽田暮れゆけり　稀　香
稽田や風気ままなるひろさ　由紀子
試歩の日の痛みいとほし菊日和　マスミ
わつと来てすぐ去ぬ雀稽田に　和　子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映　報

小春日やポストの口に手首まで　鶴　城
風邪引くな結びはいつもの母の文　昌　弘
老猫の体重測る小春かな　いちい
小春日や垣根を挟む立ち話　登志子
鶴頸の白磁に紅き冬の薔薇　みどり

――以上特選

小春日や花嫁乗せて俥ゆく　昌　弘
大切に大切にして小春の陽　竺　仙
子らの声わつと沸き立つ小春かな　陽　子
枝先の微動たにせず小六月　鶴　城
おしやれして小春日和の浅草へ　寿　恵
流行風邪わづかに粥を残しけり　登志子
仰ぎ見る巨大石仏小春の日　敏　江
小春凪船尾の波のまぶしくて　玲　子
庇まで薪積み上がり小六月　いちい
風邪やまいくぐりて九十二誕生日　禮　子
焙じ茶の香り小春の人形町　みどり

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄　報

竹林の雨はむらさき片時雨　祥　絵
枝折戸を開けて待つひと初時雨　萬　蝶
初しぐれアドレスを消しひと泣きす　理　恵
命日を静かに告ぐる初時雨　〃
初しぐれ沙金のやうに振りはじむ　喜　久
気まぐれに風が梳くなり実南天　徹　雄
初時雨水の匂ひの大原女　大場順子
磨き丸太を濡らす北山初時雨　康　世
飛石は着物の歩幅初しぐれ　昇

――以上特選

嵐山に残る青空初時雨　大場順子
天高し今朝も体操よりの一日　由　美
文殻を小さく焚きし秋意かな　祥　絵
初時雨瀞に棹さす下り舟　徹　雄
初しぐれ酒場詩人の一句かな　喜　久

山際の雲の綻び初時雨　雅夫
初時雨過去を変へたき出逢ひかな　萬蝶
初しぐれ想ひ出が今追ひ抜きぬ　理恵
吉原を粋な傘往く初しぐれ　康世
初時雨雀の親子チチチチと　岡野順子
木の葉雨乳鋲古びし大手門　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

石榴割れ一部始終を語り出す　寛治
書き出しでつまづく文の夜寒かな　〃
石榴爆ぜいざ鎌倉の切り通し　順子
音もなく夜寒の膝に猫が乗る　〃
居る筈もなき「かあさん」とよぶ夜寒　光弥
石榴裂く蜂起の狼煙ありし里　延昭
破顔めくざくろ貰ひてなごみけり　由紀子
止め椀に温もるこころ旅夜寒　昇

——以上特選

石蹴りの石の行方を柘榴の実　恵子
ふるさとの一灯思ふ夜寒かな　由紀子
実石榴に鯉が口開く庭の池　延昭
独り酌むコロナ禍つづく夜の寒し　玲子
割れ石榴光を弾くつぶつぶつぶ　マスミ
芝居はね家路の遠き夜寒かな　修
保育所は泣く子笑ふ子石榴の実　光子
石榴爆ぜベリーダンスの楽の音　昇
師を尋ぬ夜寒の膝を深く折り　寛治
ドアノブに届く石榴や二つ三つ　でん治
真二つに割れぬ石榴や意地つぱり　暦文
宝なる赤子を胸に夜の寒し　翔太
城趾いま無音の闇やざくろ爆ず　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

降つたなら味噌塗りませう朴落葉　理恵
切株に清めの塩や星冴ゆる　玲子
胸中にひびく海鳴り冬銀河　〃
合流の渦に巻かるる朴落葉　水尾
筆塚の影をすり抜け朴落葉　義子
指先で歌ふシャンソン冬の星　美佐尾

——以上特選

踏み外しさうな渓谷朴落葉　義子
切られ役倒るるごとく朴落葉　理恵
受験生たまには冬の星を見よ　美佐尾
船室に救命胴衣冬の星　水尾
荒星の中をさ迷ふ宇宙船　はるみ
禅林の静寂をやぶる朴落葉　玲子
研ぎ澄みて鼓舞するごとし冬の星　佐江

若松例会（京橋）

石田慶子
正木萬蝶報

時雨忌の雲に行方や色の浜　月を
レントゲンに乳房写らず桃青忌　〃
密と滅乱れるやうに木の葉散る　俊晴
芭蕉忌や地図たどる指産土へ　理恵
眉掃きの和毛いとほし翁の忌　マスミ
時雨忌や漁港に立てばスパイめく　ひろこ

——以上特選

御堂筋は今日も雨なりはせをの忌　月を
句を恋ふて遊子めぐる吾桃青忌　佐江
遊興の万歩計下げ芭蕉の忌　倭子
芭蕉忌や鼻緒の切れし藁草履　知子
松並木けふも晴れたり桃青忌　はるみ
時雨忌のそぞろ歩きは襟を立て　俊晴
翁忌に首途を偲び綾瀬川　理恵
芭蕉忌の川風強く翁の像　千春
時雨忌や新天地へと鳥の群　鶴城
あの辺り黄泉の入口紅葉山　萬蝶
芭蕉忌やさしづめ吾もスパイの妻　慶子
引き裂きし反故に未練や芭蕉の忌　マスミ
曲り家に熟睡したり桃青忌　ひろこ

関西例会（大阪）

森本早苗報

冬霧の国後島（くなしり）へ打つ鐘を打つ　早苗
通草熟る鵜の目鷹の目ドローンの目　〃
蹄あと消す風紋や神の旅　玲子
花八ッ手隠れて鬼に忘れられ　ゆら女
旧交の沙汰も途絶えし神無月　礼子
銀杏散るかつと見開く踏まれ邪鬼　和子
神の留守この世あの世を恐れ山　智恵子

こんなにも見事に呆け破れ芭蕉　敦子
夕闇に魔女の出没神の留守　ゆら女
むかご飯母の味には及ばざり　洋子
真夜の雨コインの輝き色落葉　智恵子
切干しの届き故郷の香り撒く　千津子
境内に日矢の金色神の留守　玲子
摩周湖の霧は尻尾をひた隠す　早苗
古書店のあるじの呟き聞き流す　和子
初時雨すれちがふ髪むらさきに　道子
子の手よりおにぎり転ぶ紅葉山　千枝子
境内の樹齢百年神無月　礼子
大人の歯生えて林檎を食むひびき　千世子
神無月朝の山並輝けり　きわゑ

――以上特選

☆

☆

新春俳句大会のお知らせ

［日　　時］ 2021年1月31日(日)　午前10時受付　12時開会

［会　　場］ 浦和駅東口　浦和パルコ10階　第13集会室

［投　　句］ ２句　当季雑詠「初」の付く新年の季語 締切11時

［参 加 費］ 2,000円　（お茶・昼食付）

※コロナの時節柄、懇親会は行いません。

［申　　込］ 参加費を添えて、1月14日(水)までに総務部宛

担当：事業部・第1例会

各地句会

水明松本句会（松本）

あの猫の爪跡残し障子張る　恒子
衣ずれの音のしさうな霜の朝　陽子
「ただいま」の次に向かふはこたつかな　マリス
高遠や箏の音聞いてもみぢ狩　玲子
外堀に流れて美しき散り紅葉　寿子

柿の木塾（浦和）

無住寺の裏手茶の花明かりかな　和葉
茶の花や作務衣の僧の遠会釈　昇
伊豆の陽をたつぷり切干届きけり　水尾
茶の花や東照宮に釣瓶井戸　かつ子
香を焚き茶の花飾りふと浄土　節代
切干の百の変身母から娘に　光弥
茶の花の豆球ほどに灯りをり　俊晴
切干に郷土の匂ひすかなり　恵子
袖垣に茶の花咲かす保育園　和子

かせわみ句会（浦和）

そつぽ向き花屋のバケツ吾亦紅　順子
小春日和江の電の席ゆづり合ふ　良枝
ハミングに十八番もはづむ小春かな　のぶこ
吾木香深き日をうけ暗紫かな　保子
山間の山に呼びかけ旅小春　友子
古き碑に色添へてをり吾亦紅　治郎
小春日や煙草燻らす老庭師　功
小春日や青春深し古書店へ　紀子
小春日和紅く輝く筑波山　せいじ
針仕事背にいつぱいの小春かな　育子

櫻蔭句会（浦和）

凍豆腐触るれば痛し夜の浜　茂子
陽だまりに椅子ひとつ置く冬はじめ　由紀子
カラフルな葉の吹き溜まる冬初め　美智枝
アンドロイドの精緻にドキッ冬初め　公子
寄り合ひは野沢菜漬に凍豆腐　多美子
手づくりの高野豆腐に残る藁　道子
冬初め万歩目指して知らぬ街　真理
初冬や声に張りある米寿の師　幸代

芙蓉句会（浦和）

畑大根光あふるる豊かさよ　正子
永久歯二十七本今朝の冬　道子
人寄せや鍋一杯の煮大根　税子
ひよつとこの貌で風呂吹き大根かな　仁
大根の変幻自在ほろ苦き　美子

水明小川句会（小川）

定位置の窓辺の景色冬隣　千代子
秋日和渡る板橋水唄ふ　むら子
小春日や公園電車の汽笛鳴る　和子
小流れや耳をすませば秋の音　きよ子
朝まだき冬の暮しの音をきく　みや
限りある朝にきらめく霜の花　綾子
公園に靴音跳ぬる秋日和　栄子

あゆみの会（浦和）

境内の箒目清し神の留守　圭子
神の留守監視カメラが杜守る　朋子
留守なれど神の手水は澄みにけり　和
神の留守猫往来の社裏　重子
神の留守おのれを信じ活動す　山遊
社でのエレキギターや神の留守　藻好

桜林句会（大宮）

路地裏に遅き日の射す花八っ手　光子
遠山に帳ひくごと初しぐれ　知子
八っ手の花手招くやうに寄り合つて　光代
初時雨陽明門を烟らせて　美佐尾

俳句の手ほどき（岩槻）

初霜の掃くほどでもなき裏参道　順子
冬の霜乗り継ぎ便を待つロビー　延昭
継続を養ふ力寒卵　倭子
いつせいに初霜光り出す野面　佐江
初霜の光り合ひたる刹那かな　ますみ
初霜や異郷のごとき景かもす　慶子
初霜の纜白し夜明かな　水尾
義士会や手に継ぎはぎの江戸の地図　徹平
新築の家に初霜銀色に　美佐尾
守り続ぐ銀杏黄葉の庭明かり　義子
里神楽ひよつとこを継ぐ伊達男　翔太
初霜や沼に動かぬ鷺一羽　忠男
頬杖の肘の継ぎ当て冬めきて　幸代
冬の夜読み継がれたる絵本かな　美子
百年を継ぐ棟梁に冬の虹　かつ子

野ばらの会（浦和）

川石にひらと貼り付く冬紅葉　夏江
煮凝にほのと暗さの艶めける　栄子
凝鮒箸こまやかに使ふ夫　茂子
はらはらと芝生を埋めし冬紅葉　和子
冬紅葉紅のあるうちまた逢はむ　治江
上り窯の白き煙や冬紅葉　秀子
煮凝のぷるんと居座る一の膳　みき子

雛の会（浦和）

木洩れ日や拾ふ落葉と踏む落葉　喜恵
石段の今朝の落葉はまだ若し　輝翠
村落に残る数軒落葉焚　むら子
眠る児を抱きあげ祓ふ七五三　燈女
人気なき園に落葉のセレナーデ　チアキ
彼の日のやうにスペイン坂の落葉雨　佐江

ミモザの会（横浜）

返り花思ひもよらず身籠れり　萬蝶
「老化です」しよげる私に返り花　栄子
小春日の補助輪はづれグータッチ　知子
十一月時刻表見る南行き　由美子
迷路めく路地に古井戸返り花　慶子
能面に秘めし煩悩返り花　玲子
老体に日々の懸垂返り花　亜弥子
浅草に古りし髪結ひ返り花　史代
立ち姿に母のおもかげ帰り花　千春

水明熊谷句会（熊谷）

浅間背に白衣観音冬日和　徹平
サンタに化けた振込め詐欺もクリスマス　正行
ぴつたりと進化の繊維冬ズボン　和子
復水（ふくすい）を飲ませてみたし枯尾花　秀子
捨て舟を抱き込んでゐる枯芒　燈女
枯芒余生の想ひゆるがせり　治江
コロナ禍の心の変化落葉踏む　栄子
人はみな秘密を持ちて枯尾花　茂子

水明鬼石句会（鬼石）

冬隣探し物して小半日　和子
藤の実のパチンとはじけ猫にげる　聡子
嫁に来て屋号でよばれ冬桜　ナヲ子
空青し柿色づきて猿げんき　洋子
目薬に耳をぬらすや十三夜　紀子

芽吹句会（浦和）

小春の日やたら胸張る袴の子　千重子
ほろ酔ひの父の饒舌おでん鍋　玲子
小春日や窓開放の体育館　チアキ
ひとり空けて座る昼めし小六月　富子
小春日や玻璃越しに見る滑走路　ひろこ
ビル並ぶ都会の岸辺冬ざるる　道を

円卓の会（浦和）

衣擦れや座敷を分かつ大屏風　翔太
鉄瓶の音のリズムや山眠る　輝翠
トランプの占ひ続く湯ざめかな　静香
湯冷めしてでも覗いてみたき秘宝館　道を
スカイプや湯冷めの脚を擦り合はす　月を
延々の身の上話湯ざめかな　鶴城

野菊の会（与野）

入れ替はる運転席や散る銀杏　和子
舞ひ止まぬ木の葉まみれやケバブ食ぶ　清子
ハイヒール響く屋上冬銀河　光子
棟方志功の女夜寒を寄せつけず　美代子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

一族は酒豪で多芸村まつり　延昭
桴さばく古老の腰や秋祭り　美枝子
紅差せば祖母の面影七五三　正信
振袖にピンクのズック七五三　俊晴
外股に火男が舞ふ村祭　倶子
七五三羽織袴にねだる剣　淑子
草もみぢ一山蜂起の弾の痕　昇

りそな俳句会（浦和）

老の背の丸みいよいよ冬めける　雅夫
鐘ひとつ鳴りて上野は冬めける　道を
冬めくや五百羅漢の凭れあふ　寛治
冬めくを肌で感じる熊野古道　勲
逆さ富士消してすまして真鴨かな　暦文
冬めきて猫にとらるる吾が寝床　久美子
鴨鍋のグルメな響き御品書　建治郎
城壁に守られ泳ぐ鴨の群れ　京子
殿は若大将か鴨飛来　マスミ

青葉の会（浦和）

兄弟と訪ふ父の里山眠る　美紗子
ありがたく小春の光纏ふなり　真理
縁側で新聞読むや小六月　美智枝
長崎や小春日和の坂の道　美子
小春日や谷中界隈足まかせ　啓子
小春日の色づく並木三輪車　公子
小春日にバスに乗らずに隣り町　洋子
野良猫に軒先貸して花八ッ手　和子
庭隅に遊びをりたる小春の陽　輝翠

神戸大池句会（神戸）

昆陽池の風波たてて冬の雁　玲子
枇杷落葉極みし彩を束ねもし　礼子
不意の雨見知らぬ人と紅葉茶屋　千津子
亡き人と分かつ喜び冬薔薇　早苗

りんどう俳句会（浦和）

見納めぞ峡の住処の冬めけり　翔太
冬めきて泰然武甲は景を変へ　卓郎
燭台かかぐ裏参道の石蕗の花　治子
俠客の舞台は赤城冬めけり　寛治
漱石の愛でし箱根路石蕗の花　紀子
走り根を摩る木漏れ日冬めきぬ　徹雄
赤子診る老医のさ庭石蕗咲けり　正信
出勤のハイヒールの音冬めけり　利子
陳皮仕上げ峡の八軒冬めきぬ　サヨ子
一個の果残す裸木冬めけり　弘夫
すくつと伸び陽を摑まんと石蕗の花　君夫
背を丸め足早の人冬めきぬ　典子
再会に交はす金盃石蕗の花　順子

たかんな俳句会（川口）

初冬や黄昏迫り琥珀色　勢津子
残り葉をやさしくぬらす時雨かな　福美
酔覚めの夜風がこぼす時雨かな　のり子
県境の大河隔つる片時雨　義子
初冬や秩父連山襞深む　水尾
三婆の話はづみて時雨止む　真知子
時雨聞く潤ひ欲しき六地蔵　和子
初冬の里山に映ゆのこり柿　久美子
老犬の影引く野道冬はじめ　静香
小夜時雨幾たびも文読み返す　鶴城

きざきサークル（浦和）

落葉径風と駆け行くスニーカー　倶子
祝詞聞く子の手の回す落葉かな　喜代子
境内の色どり深し落葉かな　かつ子
ここよりは落葉踏みしめ獣道　啓子
鞴祭酔つて浮かれて大の字に　和枝
落葉蹴り気晴らしの空高くあり　和子

花衣の会（浦和）

嵯峨しぐる竹の戦ぎの音を消し　みよ
時雨来て揺らぐ煙に硫黄の香　京子
何気なく一言もらす狂ひ花　みち
枝先にふたつ寄り添ふ帰り花　峯雄
時雨るるや医王寺の屋根光りをり　治
帰り花誰か遠くで呼ぶやうな　章嘉

鶴川山百合句会（鶴川）

朝寒や小用後の武者震ひ　雄二郎
そぞろ寒鴨居に架ける感謝状　月を
花魁の素性は朱い曼珠沙華　喜久
夜寒かな背凭れのなき椅子にかけ　史代
朝寒や婚家の味のおみそ汁　広子
庖丁の試し切りしてうそ寒し　知子
運動会二番で悔し涙あり　由美子
朝寒や先づは朝刊訃報欄　千春
酒饅頭の香る湯の町そぞろ寒　萬蝶
招かれざる客もをるなりうすら寒　理恵
おもむろに墨磨る音の夜寒かな　玲子

和歌山水明句会（和歌山）

踏み入りし深落葉道翁の忌　和子
鳥渡る最高階のレストラン　道子
袴の裾踏んでころびぬ七五三　千枝子
お漏らしのズボン乾かぬ神無月　千世子
松の間の時代絵巻や菊匂ふ　満耶子
秋惜しむ一球一球魂込め　きわゑ
さう言へば母も柿好き柿供ふ　洋子
おづおづと菌密なる丸木橋　廸代

皐月の会（浦和）

冬初め一糸纏はぬ秘湯かな　紀子
ロボットの掃除見てゐる文化の日　静香
心して行くこの径や紅葉谷　久子
フェルメール展瑠璃色あふれ文化の日　暦文
エロ本に解けぬ数式今朝の冬　きいち

光が丘俳句教室（東京）

旧道に野仏多し石蕗の花　守伊
石蕗の黄やだんまりきめて夕暮るる　はる
つわの花呟くような母の唄　康子
ふと気づく猫の定位置冬はじめ　史子
ご利益は手の平程の熊手にも　竜也
疫病を掻いて捨てたし大熊手　理恵

櫟の会（浦和）

マネキンのセーター姿につい見惚れ　裕之
冬もみぢ夫婦仲にもすきま風　克之
セーターを編む母の背に寄りそふる　朋子
折にふれ羽織る形見のカーディガン　富子
ボール蹴る親子揃ひの赤セーター　千重子
セーターに若さをつつむ娘らまぶし　彰二
冬紅葉哀史を秘むる煉瓦塀　治子

山茶花（浦和）

山茶花散る晩鐘一打また一打　マスミ
木枯とサイレン遠く夜具の中　光子
木枯や岩につまづく古戦場　泰子
山茶花や小雨でも待つラジオ体操　清一
凩に足とられ行く散歩道　嶺一
山茶花の咲く頃句会生れたり　美江子
木枯の音きく夜ふけの旅の宿　しず子
山茶花や花開くより散るを愛で　綾子

新樹の会（浦和）

凍雲や廃校になほ古時計　道を
入口に番傘ひとつ小夜時雨　清吉
南座の師走歌舞伎や三番叟　でん治
冬の雲親の法事もままならず　平通
凍雲や遊び続かず散る子供　修
滑るやに自転車の列冬の雲　京子
翅振れぬまま地に伏せり冬の蝶　韶子
番長の押忍のひと声雪しまき　鶴城

珊瑚の会（浦和）

痩身に傷が脈打つ霜夜かな　和子
頬被外して土間で身を叩く　広子
ゆつたりとアールグレイを霜の夜　和葉
門灯の淋しく点る夜の霜　かつ子
峡十戸固く門閉づ霜夜かな　喜恵
頬被解いて小昼を木挽小屋　マスミ
霜の夜気休めに飲む置薬　水尾
朝市女の愛想を包む頬かぶり　昇
うどんに卵おかかたつぷり霜の夜　恵子
利根運河いまは静かに霜のこえ　光子
独り居や霜夜の耳を聡くせり　史代
物言へばはらり解けたる頬　節代

蝌蚪の会（浦和）

影遊び冬暖かく八〇〇〇歩　元美
北海の匂ひ弾ける焼柳葉魚　宣子
現代アートの点滅信号冬の星　るみ子
木の上で猫の曲芸冬ぬくし　さち子
泣き顔の焼柳葉魚喰ふ夕べかな　礼子
口先の揃ふ柳葉魚の行儀良き　鶴城
喧嘩して仲直りして冬暖か　月を

水明忌のご案内

［日　　時］ 2021年2月17日㈬　午前10時受付　12時開会

［会　　場］ 浦和駅東口　浦和パルコ10階　第15集会室

［投　　句］ ２句　早春一切、当季雑詠（早春二句可、雑詠二句は不可）

［参 加 費］ 2,000円　（お茶・昼食付）

※コロナの時節柄、懇親会は行いません。

［申　　込］ 参加費を添えて、１月10日㈰までに総務部宛

担当：事業部

風　声

○**俳句四季**十一月号―「季語を詠む」欄
「絨毯」
絨毯の上に虎皮そしてＤｏｎ　**鬼之介**
○**現代俳句**十一月号―「現代俳句の風」欄
利き腕にフランスパンを生身魂　菊池ひろこ
畦道をじんじんばしよりゐのこづち　染谷　正信
○**天塚**（宮谷昌代主宰）十一月号―「珠玉一句」欄
刊を祝ぐ友の句集よ涼新た　**鬼之介**
○**くぢら**（中尾公彦主宰）十一月号―「受贈俳誌美術館」欄
戒名を付けてやりたき秋の蝉　**鬼之介**
○**雲取**（鈴木太郎主宰）十一・十二月号―「現代俳句管見」欄
年頃のかな女の写真秋の昼　**鬼之介**
○**幻**（西谷剛周主宰）十一月号―「受贈誌拝見」欄
年頃のかな女の写真秋の昼　**鬼之介**
○**新月**（松田碧霞主宰）十一月号―「受贈俳誌紹介」欄
刊を祝ぐ友の句集よ涼新た　**鬼之介**
○**太陽**（柴田南海子主宰）十一月号―「一誌一耀」欄
刊を祝ぐ友の句集よ涼新た　**鬼之介**
○**玉梓**（名村早智子主宰）十一・十二月号―「他誌拝見」欄
刊を祝ぐ友の句集よ涼新た　**鬼之介**
○**菜の花**（伊藤政美主宰）十一月号―「諸家近詠」欄
九九を復誦する子励ます法師蝉　**鬼之介**
○**山彦**（河村正浩主宰）十一月号―「諸家近詠」欄
十万億土聞くだに遠し酔芙蓉　**鬼之介**
○**萌**（三田きえ子主宰）十一月号―「名句探訪」欄
飲み乾さむいざギヤマンの馬上盃　**鬼之介**
○**谺**（山本一歩主宰）十一月号―「受贈誌の一句」欄
方寸の庭静かなり若葉寒　日高　道を
転進の決意の時やほととぎす　青木　鶴城
○**四季**（松澤雅世主宰）十一・十二月号―「俳誌管見」欄
伊東類氏筆による水明八・九月号の紹介記事
かな女の「ねばりひきあろかと田向ふ初蛙」の主宰註を紹介。
水明が創刊九十年（千八十号）を迎え日本を代表する俳句結社で今後も日本を代表する一誌としてリーダーシップを発揮してほしいと激励。
（以下掲載句のみ紹介する）
主宰詠「祝」八句より
水神の在す狭霧の姥淵　〃
明月や巫女舞の鈴杜に染む　〃
創業社主の銅像攻むる赤蜻蛉　〃
年頃のかな女の写真秋の昼　〃
「特別作品（競作）」より
見沼田に春を告げむと鷺舞へり　井口　俊晴
転びし子は花びらを手放さず　〃
二拍子を揃へ三代四方拝　近藤　徹平
初緑迎賓館のファンファーレ　〃
硬券の「幸福駅」や年迎ふ　保坂　翔太

初雀軒の混成カルテット　保坂翔太

「各集より」

噴水と体内時計通ひ合ふ　菊池ひろこ
髪切つて青水無月の風通す　西山貴美子
父の日や同じ薬を飲んでゐる　網野月を
全山をゆるがす瀧を神と見し　十倉和子
とんぼとんぼ生まれし沼を離れずに　松本光子
日向かひに打つて出ていく蟻一つ　渡辺舎人
梅雨入かな少し派手目の傘を買ひ　熊倉千重子
夏至の日の始発のバスの客となる　石田慶子
松明に浮かぶ童女の白重　日髙道を
衣更ふ女人ふはりと色めきて　臼田みち
人影のなき公園に藤咲けり　榊原聡子

（日髙道を抄出）

＝水明掲示板＝

◆埼玉県俳句連盟文化祭俳句大会

兼題の部

秀逸賞　大塚茂子

一本を決めて裸足の女子剣士

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和二年十一月三十日現在―

山本鬼之介　50口
プライム インフォメーション　25口
中央美版　25口
近藤徹平　10口
井田眞子　10口
保坂翔太　5口
宮井美恵子　5口
石田慶子　10口
水野興二　1口
島津初花　5口
森本早苗　10口
匿名　2口
―小計　158口

丸山マスミ　2口
内田恵子　2口
石井喜恵　2口
茂木和子　2口
松本光子　2口

石山かつ子　1口
大村節代　1口
星野和葉　1口
柚木治子　5口
河野はるみ　1口
本橋稀香　1口
染谷正信　10口
日髙道を　3口
青木鶴城　3口
曲淵徹雄　2口
下川光子　1口
荒井倶子　1口
笹本啓子　1口
神田治江　2口
鈴木和子　2口
越田栄子　2口
椎野美代子　10口
福田千春　20口
―全国大会小計　77口
―合計　235口

水明の運営組織（令和３年１月１日より）

主　　宰　山本鬼之介

運営幹事長　網野月を

編 集 長　大村節代

常任運営幹事　網野月を　大村節代　石山かつ子　日髙道を
青木鶴城　保坂翔太　石井喜恵　井口俊晴
曲淵徹雄

運営幹事　大橋廸代　宇田白鷺　椎野美代子

各　　部

総務部［会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般］

部長・日髙道を　石井喜恵　大場順子

事業部［水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係用務、編集企画］

部長・網野月を　副部長・青木鶴城
保坂翔太　曲淵徹雄　内田惠子　松本光子
太田絹映　河野はるみ　反町　修　岡田宣子

編集部［水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務］

部長　大村節代　石山かつ子　丸山マスミ
大塚茂子　野田静香

事務局［常任運営幹事会の議案と議事録の作成］

局長　井口俊晴

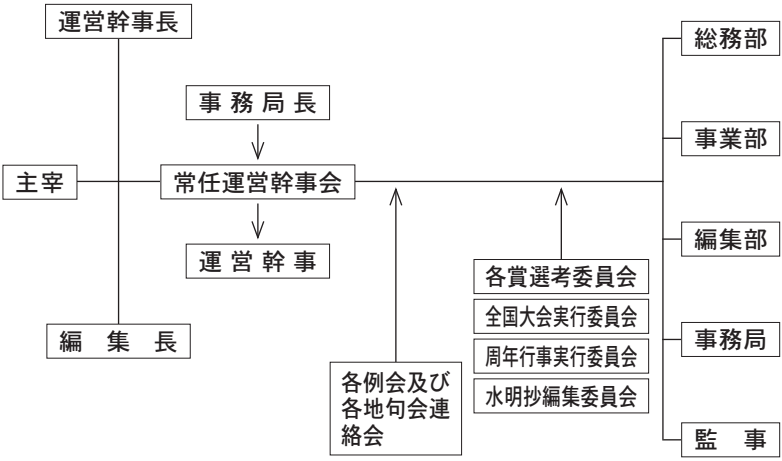
監　事［水明俳句会及び水明発展基金の会計監査］

山中みどり　新　暦文

水明発展基金役員（令和３年１月１日より）

会　　長　山本鬼之介
幹　　事　網野月を　大村節代　日髙道を　石山かつ子
井口俊晴
監　　事　山中みどり　新　暦文

水明俳句会の運営組織図（令和３年１月１日より）



水明俳句会各賞選考委員会（令和３年１月１日より）

水明賞				
主宰	網野月を	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
	井口俊晴			
季音賞				
主宰	網野月を	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
かな女賞				
主宰	［運営幹事長と編集長の同意を得る］			
新珠賞				
主宰	網野月を	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
	井口俊晴	保坂翔太	青木鶴城	日髙道を
推選委員：	大橋廸代	宇田白鷺	椎野美代子	波多野寿子
	茂木和子			
鼓笛賞				
大村節代	［主宰と運営幹事長の同意を得る］			
山紫賞				
網野月を	［主宰と編集長の同意を得る］			

令和３年主要年間行事等予定表

令和３年１月１日

行事名	日程	誌上案内	開催場所等	主担当	支援
新春俳句大会	１月31日(日) 10時	12月・１月号	浦和パルコ10階 第13集会室	第一例会	事業部
水明忌	２月17日(水) 10時	１月・２月号	浦和パルコ10階 第15集会室	事業部	
春の吟行会	３月29日(月)	１月･２月･３月号	本所・ ビッグシップ	第二例会	事業部
全国大会	６月28日(月) 10時	４月･５月･６月号	ロイヤルパインズホテル浦和	実行委員会	事業部
水明夏行	７月29日(木) ～31日(土)	６月･７月号	浦和パルコ10階	事業部	
りんどう忌	９月25日(土)	７月・８月 ９月号	未定	事業部	
水明塾	10月29日(金)	８月・９月 10月号	浦和パルコ10階	事業部	

（注）予定表の詳細未定については、月日・場所等が変ることもあります。
本行事予定表にない日帰り吟行会、吟行旅行等については個別に対応。
※「水明忌」は如月忌、紗一忌、光二忌を統合した忌日。

水明例会および各地句会・教室のご案内

（令和３年１月１日）

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先（自宅電話番号等）
第一例会	第１日曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10F）	山本鬼之介	茂木　和子　048-886-1860 境　延昭　048-686-2281
第二例会	第３金曜 13時	本所ビッグシップ （東京・本所）	網野　月を	太田　絹映　03-3819-6730
第三例会	第１月曜 13時	京橋区民会館 （東京・京橋）	山本鬼之介	五明　昇　048-858-7155 曲淵　徹雄　048-864-4018
第四例会	第１木曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10F）	椎野美代子	境　延昭　048-686-2281 石井　喜恵　048-683-0801
第五例会	第３火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤　佐江　0480-22-4011 河野はるみ　090-9008-6422
若松例会	第１土曜 13時	京橋区民館 （東京・京橋）	山本鬼之介	石田　慶子　03-3853-2048 正木　萬蝶　045-491-8773
関西例会	第３日曜 13時	守口文化（セ） （大阪・守口）	大橋　廸代	森本　早苗　078-583-6225
水明鬼石句会	第３水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 （群馬・鬼石）	野口　和子	野口　和子　0274-52-3418 越田　栄子　048-525-5835
水明小川 俳句に親しむ会	第２金曜 13時	大塚コミュニティ （セ）（埼玉・小川）	森　千代子	加藤むら子　0493-72-0012
水明熊谷句会	第４火曜 13時	熊谷市立 コミュニティセンター	山本鬼之介	大塚　茂子　048-596-1538 越田　栄子　048-525-5835
雛の会	第２木曜 13時	水明発行所	石山かつ子	梅澤　佐江　0480-22-4011
櫻蔭句会	第３金曜 13時30分	浦和コミセン （パルコ・10F）	丸山マスミ	阿部　幸代　048-974-1704
桜林句会	第１金曜 13時	大宮生涯学習（セ） （さいたま・大宮）	椎野美代子	山田美佐尾　048-861-3968
野菊の会	第２水曜 13時	下落合公民館 （さいたま・中央）	椎野美代子	茂木　和子　048-886-1860 下川　光子　048-857-2120
芽吹句会	第３金曜 13時30分	浦和コミセン （パルコ・10F）	山本鬼之介	日髙　道を　048-886-8173

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先（自宅電話番号等）
柿の木塾	第３金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木　和子　048-886-1860
歩の会	第１金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木　和子　048-886-1860
りそな俳句会	第２火曜 18時	浦和コミセン （パルコ・10F）	星野　和葉	高島　寛治　048-782-8809
山茶花	第１水曜 10時	本太公民館 （さいたま・浦和）	星野　和葉	宮下　嶺一　048-882-7593
はこべ句会	第４土曜 13時	水明発行所	勉強会	下川　光子　048-857-2120
櫟の会	第３水曜 13時	常盤公民館 （さいたま・浦和）	星野　和葉	柚木　治子　048-831-6158
珊瑚の会	第４木曜 13時	水明発行所	研究会	大村　節代　048-862-9658
芙蓉句会	第２金曜 ９時30分	六辻公民館 （さいたま・南）	山本鬼之介	山戸　美子　048-677-8775
かわせみ句会	第２火曜 13時30分	南浦和公民館 （さいたま・南）	勉強会	福田　育子　048-882-1045
花衣の会	第３水曜 13時	土合公民館 （さいたま・桜）	大村　節代	田中　章嘉　048-862-5936
たかんな俳句会	第３木曜 13時	芝２丁目集会所 （埼玉・川口）	山本鬼之介	野田　静香　048-261-1858 青木　鶴城　048-829-2776
きざきサークル	第３木曜 14時	木崎自治会館 （さいたま・浦和）	松本　光子	森　和子　048-832-6565
ひまわり句会	第１木曜 13時	草加アコスビル （埼玉・草加）	勉強会	小倉　倭子　048-925-8080 石田　慶子　03-3853-2048
花ごよみ句会	第３月曜 13時	さいたま市民活動サポートセンター （パルコ・９F）	星野　和葉	山下ユリ子　048-861-6685
野ばらの会	第２水曜 13時	さいたま市民活動サポートセンター （パルコ・９F）	星野　和葉	緒方みき子　048-881-8643
皐月の会	第２金曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10F）	山本鬼之介	渋谷きいち　048-832-5319
青葉の会	第３月曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10F）	山本鬼之介	梅澤　輝翠　090-9825-3415
新樹の会	第４月曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10F）	山本鬼之介	青木　鶴城　048-829-2776

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 （自宅電話番号等）
けやきの会	第２月曜 13時	社会福祉会館 （東京・中野）	勉強会	鈴木　康世　080-5089-4052
鶴川山百合句会	第４火曜 13時	玉川学園文化（セ） （東京・町田）	町野広子	鈴木　玲子　044-952-3643
ミモザの会	第２火曜 13時	アートフォーラム あざみ野（横浜）	勉強会	福田　千春　045-901-6032
水明松本句会	第４週末	波多野寿子宅 （長野・松本）	波多野寿子	波多野寿子　0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 （福井・若狭）	宇田　白鷺	鳥羽　和風　0770-64-1211 島津　初花　0770-64-1626
水明大阪俳句会	第２土曜 13時	守口文化（セ） （大阪・守口）	伊藤　敦子	伊藤　敦子　06-6996-7160
和歌山水明句会	第２木曜 13時	太田自治会館	大橋　廸代	大橋　廸代　073-471-5582 西浦千枝子　073-471-7929
神戸大池句会	第２火曜 13時	神戸市勤労会館 （神戸・中央）	勉強会	田寺　玲子　078-914-0341 森本　早苗　078-583-6225
光が丘俳句会	第３火曜 13時	光が丘区民（セ） （東京・練馬）	勉強会	石川　理恵　03-3938-0208 水落　守伊　03-3970-2723
りんどう俳句会	第２水曜 13時	浦和コミセン （パルコ・10Ｆ）	山本鬼之介	高島　寛治　048-685-2811 大場　順子　048-647-5157
俳句の手ほどき岩槻教室	第１・３水曜 13時	岩槻駅東口 コミセン	山本鬼之介	石山かつ子　048-757-2484
コクーンシティカルチャー俳句教室	第２・４金曜 13時30分	コクーンシティ カルチャー （さいたま新都心）	境　延昭	五明　昇　048-858-7155 井口　俊晴　048-824-2024
あゆみの会	第２・４木曜 13時30分	楷風亭 （北浦和公園内）	境　延昭	鈴木　藻好　048-825-0158
蝌蚪の会	第３月曜 ９時	さいたま市民活動 サポートセンター （パルコ・９Ｆ）	網野　月を	岡田　宣子　048-825-6502
円卓の会	第４金曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター （パルコ・９Ｆ）	網野　月を	青木　鶴城　048-829-2776
繭の会	第１月曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター （パルコ・９Ｆ）	網野　月を	青木　鶴城　048-829-2776
若鮎句会	第２土曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター （パルコ・９Ｆ）	網野　月を	青木　鶴城　048-829-2776

後記

明けましておめでとうございます

昨年から日本いや世界を、恐怖に曝している新型コロナウイルスが、衰えを見せず、大変な令和三年の幕開けです。

水明でも昨年六月に「創刊九十周年記念全国大会・記念祝賀会」を大大的に行なう予定でした。しかしコロナによって予約していたホテルが自粛、日本中が一気に自粛ムードが高まって、全国大会もあえなく取り止めとなりました。

けれども、コロナが少し下火になった十一月に、待望の全国大会をロイヤルパインズホテルで開催することが出来ました。遠方の方々に御参加頂けず、祝賀会も行なえませんでした。しかし、受賞された方々の晴れやかなお顔を拝見し、心から良かったと思いました。

大会の様子は、司会・進行を担当さった五明昇氏が、本号に詳しくご報告して下さいました。心ならずもご出席がかなわなかった会員の皆様も、五明氏の記事と裏表紙の写真をご覧になって、受賞された方々を、お祝い下さい。

また、今年は「山紫集」と言う新しい企画が始まります。今までは、季音「雪・月・花」・水明集・鼓笛集でしたが、ここに山紫集が加わります。山紫集は雪欄以外の水明全同人が一句で競うという、画期的な物です。投句資格のある方は、こぞってご参加下さい。

尚、巻末に今月から投句用紙を添付しています。投句用紙に「今月の季語」も明記してありますので、ご参加下さい。

一月号から編集部は、石山かつ子、大塚茂子、野田静香、丸山マスミ、大村節代の五人体制で水明の編集を行なっています。

今年もご協力よろしくお願いします。

（節代）

今月のはてな?

戦捷（せんしょう・センセフ）…戦いに勝つこと　40

活草（いきぐさ）…弁慶草の別称　48

宛ら（さなが・ら）…あたかも　62

兀兀（こつこつ）…着実に努力するさま　51

継粉（ままこ）…水にこなれず残った粉　22

顳顬（こめかみ）　21

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）

時間：午後１時～午後５時

（火・木・土・日・祭日は休み）

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和三年一月号
通巻一〇八四号
令和三年一月一日発行

発行人　山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一一七一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所　中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

四月号　一月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

き り と り せ ん

山紫集

四月号　一月二十五日締切

一月の兼題「待春・春待つ」

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

モンローの唇ほどや石榴笑む　椎野美代子
祈りつつ土器飛ばす紅葉山　島津初花
磨き丸太を濡らす北山初しぐれ　鈴木康世
神苑の日矢の金色神の留守　田寺玲子
浅草に古りし髪結ひ返り花　永野史代
ゆくりなくも出逢ふ時雨の汐見坂　西山貴美子
初紅葉一生分の一日燃ゆ　小倉倭子
山間の稽田縫うて郵便夫　丸山マスミ
初しぐれ沙金のやうに降りはじむ　藤澤喜久
産土の杜に灯が点く冬至かな　鳥羽和風
初時雨水の匂ひの大原女　大場順子
茹でてなほ花咲蟹の威厳かな　森本早苗
菩提寺は山のまた奥木の葉散る　野口和子
いつせいに初霜光り出す野面　梅澤佐江
胸中にひびく海鳴り冬銀河　井上玲子
草紅葉夕日が沈む地平線　井口俊晴
花八手椅子が二つの理髪店　野平美紗子
おでん鍋湯気の向かうに明日がある　宮﨑チアキ

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

カラカラと笑ふ卒塔婆秋高し　曲淵徹雄
彩と香を愛でし一鉢菊膾　原田秀子
本尊の陰でとよもすちちろ虫　保坂翔太
閉園の回転木馬秋夕焼　越田栄子
辻に立つ戦捷の碑よ草紅葉　染谷正信
秋暁の水の硬さを手に掬ふ　横山君夫
肌寒のはなれて二人レモンティー　渋谷きいち
菊覚めて無音の寺を彩れり　神田治江
篁に射し込む光秋の声　野田静香
雨冷や見沼田を行く傘二つ　日高道を
この道を選ばばきつと別の秋　青木鶴城
林中にぽとんと音が秋の声　塩野久子
秋の声悲喜こもごもの古戦場　新暦文
手入れせし庭正装の秋日和　川村治
豊作に舞ふ巫女の笑み神楽殿　梅澤輝翠
花芙蓉ニンフ微笑むやうな朝　西幅公子
離れ庵ぽつと華やぐ初紅葉　加藤でん治
柿すだれさびしき村を煌々と　石川理恵

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木満蝶
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明　令和三年一月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第一号）　定価　一〇〇〇円